

# 崩レ塚古墳群 クズレ塚古墳

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告4—

1990.3

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

題字：永礼達造津山市長

# 崩レ塚古墳群 クズレ塚古墳

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告4—

1990.3

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

## 序

崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳は津山中核工業団地造成により発掘調査された古墳であります。

開発と文化財保護との問題は古くて新しい問題であり、常に表裏一体のものであります。幸い原因者である津山市土地開発公社の御配慮により、唯一の前方後円墳（一貫東1号墳）は緑地公園に取り入れ、現状保存措置を講ずることができました。54haという広大な津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡が点在しています。再三にわたってそれらの保存の協議がなされましたが、最終的に遺跡の保存をすると造成ができないという結論に達し、記録保存を余儀なくされたのであります。本書はその第4集にあたる報告書であります。

さて、崩レ塚古墳群とクズレ塚古墳は計5基の古墳からなります。特にクズレ塚古墳は、美作地方でも有数の規模を誇る横穴式石室に、陶棺と言う美作地方特有の棺桶が使用されておりました。また、古墳の下からは、さらに古い縄文時代の土器も出土し話題を呼びました。

このように発掘調査によって得られる情報量の蓄積は、遺跡保存措置と同じように非常に重要なことであると思います。いずれにせよこうして一遺跡を記録保存できたことは、この上ない喜びであります。

ここに、ささやかではございますが報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をいただければ幸いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大な御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

平成2年3月31日

津山市教育委員会

教育長 萩原 賢二

## 例　　言

1. 本書は津山中核工業団地造成に伴う崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳の発掘調査報告書である。
1. 津山中核工業団地内には10ヶ所の遺跡があるが、本書はその第4集にあたるものである。
1. 発掘調査経費はすべて、原団者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は、津山市教育委員会文化課主事行田裕美、同主事小郷利幸が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また方位は、平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第8図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 本書の執筆はI・IIを行田が、III・IV・Vを小郷が担当し、編集は小郷があつた。
1. 遺物整理には、杉山紀子、飯田和江、野上恭子、光永純子、日笠月子、赤松百合子の協力を得た。
1. 出土遺物及び図面は、津山市教育委員会・津山郷土博物館（津山市山下92）、二宮埋蔵文化財整理事務所（津山市二宮1978-1）に保管している。

## 本文目次

I	津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過	1
1	津山中核工業団地造成に至る経過	1
2	発掘調査に至る経過	2
II	津山市中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡	4
1	津山中核工業団地内の遺跡	4
2	周辺の遺跡	7
III	調査の経過	9
1	調査に至る経過	9
2	調査経過	9
3	調査体制	9
IV	調査の記録	11
1	ケズレ塚古墳	11
(1)	立地と調査前の状況	11
(2)	墳丘と周溝	12
(3)	埋葬施設	12
(4)	埋葬主体	17
(5)	遺物の出土状況	17
(6)	出土遺物	18
(7)	下層遺物の出土状況	24
(8)	下層出土遺物	25
2	崩レ塚1号墳	30
(1)	立地と調査前の状況	30
(2)	墳丘と周溝	30
(3)	埋葬施設	31
(4)	出土遺物	31
3	崩レ塚2号墳	32
(1)	立地と調査前の状況	32
(2)	墳丘と周溝	32
(3)	埋葬施設	33
(4)	出土遺物	33

4 崩レ塚3号墳	33
(1) 立地と調査前の状況	33
(2) 墳丘と周溝	33
(3) 埋葬施設	34
(4) 出土遺物	36
5 崩レ塚4号墳	36
(1) 立地と調査前の状況	36
(2) 墳丘と周溝	37
(3) 埋葬施設	37
(4) 出土遺物	37
V まとめ	38
1 クズレ塚古墳について	38
2 崩レ塚古墳群について	41
3 縄文時代の遺構・遺物について	41

## 挿 図 目 次

第1図 津山市位置図	1
第2図 津山中核工業団地位置図	2
第3図 第I・II期工事区分図	2
第4図 周知の遺跡分布図	2
第5図 調査前航空写真（北から）	3
第6図 トレンチ設定状況航空写真（南から）	3
第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図（S=1:10,000）	4
第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図（S=1:25,000）	7
第9図 クズレ塚古墳調査前墳丘測量図（S=1:150、トーン部分が横穴式石室）	10
第10図 クズレ塚古墳墳丘測量図（S=1:150）	11
第11図 墳丘断面図（S=1:50）	13~14
第12図 横穴式石室平・断面図（S=1:50）	15~16
第13図 遺物出土状況（S=1:50）	17
第14図 出土遺物1（S=1:3）	19
第15図 出土遺物2（S=1:3）	20
第16図 出土遺物3（S=1:3）	21

第17図 出土遺物 4 (S = 1 : 2) .....	21
第18図 出土遺物 5 (S = 1 : 20) .....	22
第19図 下層遺物出土状況及びグリッド配置図 (S = 1 : 150) .....	24
第20図 下層遺物出土状況 1 (S = 1 : 40、番号がないのは縄文土器) .....	25
第21図 下層遺物出土状況 2 (S = 1 : 40、番号がないのは縄文土器) .....	26
第22図 下層遺物出土状況 3 (S = 1 : 40) .....	27
第23図 下層出土遺物 (S = 1 : 4) .....	28
第24図 崩レ塚古墳群配置図 (S = 1 : 300) .....	29
第25図 崩レ塚 1号墳平・断面図 (S = 1 : 100) .....	30
第26図 1号墳主体部平・断面図 (S = 1 : 40) .....	31
第27図 崩レ塚 2号墳平・断面図 (S = 1 : 100) .....	32
第28図 2号墳主体部平・断面図 (S = 1 : 40) .....	33
第29図 崩レ塚 3号墳平・断面図 (S = 1 : 100) .....	34
第30図 3号墳主体部平・断面図 (S = 1 : 40) .....	35
第31図 3号墳主体部土層図 (S = 1 : 40) .....	35
第32図 崩レ塚 4号墳平・断面図 (S = 1 : 100) .....	36
第33図 4号墳主体部平・断面図 (S = 1 : 40) .....	37
第34図 須恵器分類図 .....	38
第35図 クズレ塚古墳陶棺部分出土遺物 1 (S = 1 : 4) .....	40
第36図 クズレ塚古墳陶棺部分出土遺物 2 (S = 1 : 3) .....	44
第37図 クズレ塚古墳陶棺部分出土遺物 3 (須恵器 S = 1 : 3、土師器 S = 1 : 4) .....	45

## 表 目 次

第1表 津山中核工業団地内遺跡調査一覧表 .....	6
第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表 .....	8
第3表 出土遺物観察表 .....	23
第4表 下層出土標観察表 .....	28
第5表 陶棺部分出土遺物観察表 .....	43

## 図版目次

- 図版 1-1 クズレ塚古墳遠景（北西から）  
2 クズレ塚古墳全景（西から）
- 図版 2-1 石室奥壁部分  
2 周溝土層断面（南側、東より）
- 図版 3-1 石室内遺物出土状況（全体）  
2 石室内遺物出土状況（部分）
- 図版 4-1 下層遺物出土状況  
2 下層遺物出土状況
- 図版 5 出土遺物 1（須恵器）
- 図版 6 出土遺物 2（須恵器）
- 図版 7 出土遺物 3（縄文土器 1・2、土師器 20~22、鉄鎌 27、耳環 28~30）
- 図版 8 出土遺物 4（陶棺部分出土須恵器 1、陶棺 2、鉄滓 3）
- 図版 9-1 崩れ塚 1号墳全景（北から）  
2 1号墳主体部（調査前、北西から）  
3 1号墳主体部（調査後、北西から）
- 図版 10-1 崩れ塚 2号墳全景（北から）  
2 2号墳主体部（北から）
- 図版 11-1 崩れ塚 3号墳全景（北東から）  
2 3号墳主体部（調査前、南東から）  
3 3号墳主体部（調査後、北西から）
- 図版 12-1 崩れ塚 4号墳全景（北東から）  
2 4号墳主体部（北東から）

# I 津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

## 1 津山中核工業団地造成に至る経過

昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・教育・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の建設と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予想され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加郡工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の5つの工業団地があるが、いずれも企業誘致が完了しており、今後さらに企業の進出が予想されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圏計画でもある津山新都市整備圏計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地(100ha)、中央に津山工場公園(154ha)、西部に久米工場公園(170ha)と通産省の工業内配置政策の本旨にかなった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和50年3月、最終的に津山市独自で対応することを決定し、



第1図 津山市位置図

従来津山工場公園と呼称していたものを現在の津山中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなどの推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかつた地域を除き最終的に54.1haに規模を縮小し工事を発注する運びとなった。

## 2 発掘調査に至る経過

昭和59年5月10日付津土開公第4号で文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について(通知)」が提出された。これは、事業予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の2工区に分けていた段階(第3図)の第Ⅰ期工事部分約123,000m<sup>2</sup>に相当するものである。これを受け津山市教育委員会では地形的にみて、周知の遺跡(第4図)以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借上げ、幅2mのトレーナーを等高線走向に直行するように5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は6月27日～7月5日までを費やした。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に分布することが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方後円墳1、円墳1、方墳1の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施は避けられなかった。

第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付



第2図 津山中核工業団地位置図



第3図 第Ⅰ・Ⅱ期工事区分図



第4図 周知の遺跡分布図

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000m<sup>2</sup>である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることになった。すなわち、立木伐採後再度協議をするという



第5図 調査前航空写真（北から）



第6図 トレンチ設定状況航空写真（南から）

ことである。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳4基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畠遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

## II 津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

### 1 津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周知の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳1（一貫東1号墳）円墳1（一貫東2号墳）、方墳1（一貫東3号墳）、弥生土器・須恵器の散布地2ヶ所（崩レ塚遺跡、大畠遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新たに



第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図 (S=1:10,000)

円墳4基（クズレ塚古墳、大畠1・2号墳、小原1号墳）を発見した。しかし、その後のトレーナによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいたった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

### 1 一貴西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳3基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址4軒、建物址2棟、段状造構等により構成される。古墳の内訳は5世紀末頃と考えられる方墳2基と6世紀末頃と考えられる円墳1基である。製鉄関連遺構としたものには住居址1軒、建物址6棟、段状造構、廐津捨て場等がある。製鉄炉は後世の畠地造成のため遺存していなかった。

### 2 一貴東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土壙墓群、古墳8基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址4棟、段状造構等により構成される。貯蔵穴は47基、土壙墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳1基、円墳3基、方墳4基である。時期はいずれも5世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址2棟、段状造構等がある。

### 3 深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状造構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址2軒、建物址1棟より構成される。古墳時代の段状造構には鍛冶炉も含まれる。中世の建物址は2軒を数える。

行田裕美・保田義治・木村祐子『深田河内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集 1988年

### 4 別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状造構よりなる。弥生時代中期の集落は住居址8軒、長方形竪穴住居状造構1軒、建物址9棟、段状造構等により構成される。奈良時代の段状造構からは鉄滓が出土している。

### 5 崩レ塚古墳群

方墳3基、円墳1基より構成される古墳群である。方墳3基はいずれも箱式石室を主体部にもち、円墳は石蓋土壙墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

### 6 クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である（註1）。横穴式石室を主体部に持つ円墳である。横穴式石室現存長約9mを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺1体が納められていた。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた礫群と共に繩文土器23点が出土した。

### 7 崩レ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窓状遺構3基よりなる。弥生時代中期の集落は住居址3軒、長方形住居状遺構1軒、段状遺構等により構成される。

保田義治・行田裕美『崩レ塚遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集 1989年

#### 8 柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎大刀把頭、鞘尾金具が出土した。時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

保田義治・行田裕美『柳谷古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 1988年

#### 9 大畠遺跡

弥生時代後期の集落、古墳2基、製鉄関連遺構等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状遺構等により構成される。他に上塙幕も検出されている。古墳はどちらも木棺直葬墳であり、時期は6世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する遺構には住居址、建物址、鉄滓集中地点等がある。時期は7世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窓状遺構1基がある。

#### 10 小原遺跡

弥生時代後期の集落、古墳4基、炭窯と考えられている窓状遺構3基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址16軒、建物址4棟、貯蔵穴12基、段状遺構等により構成される。古墳はいずれも円墳である。1号墳は箱式石棺、2号墳は土壙、3号墳は石蓋土壙を主体部にもつ。4号墳は周溝が検出されただけで、内部主体は不明である。1号墳と2号墳には製陶土器が伴出している。時期は5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。

第1表 津山中核工場団地内遺跡調査一覧表

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定期
1	一貫西遺跡	22,000m <sup>2</sup>	S59 11/26～5/26	行田 裕美	平成元年度 津山中核工場団地埋蔵文化財発掘調査報告3
2	一貫東遺跡	20,000m <sup>2</sup>	S60 3/7～12/2	湊 哲夫	平成3年度 津山中核工場団地埋蔵文化財発掘調査報告9
3	深田河内遺跡	3,300m <sup>2</sup>	S61 %～%、%～%	行田 裕美	昭和63年度(既刊) 津山中核工場団地埋蔵文化財発掘調査報告2
4	別所谷遺跡	9,400m <sup>2</sup>	S61 7/26～10/23	行田 裕美	平成2年度 6
5	崩レ塚古墳群	1,400m <sup>2</sup>	S62 8/28～10/19	小郷 利幸	平成元年度
6	クズレ塚古墳	200m <sup>2</sup>	S62 8/4～11/6	小郷 利幸	4
7	崩レ塚遺跡	5,100m <sup>2</sup>	S62 10/7～1/30	保田 義治	平成元年度(既刊) 5
8	柳谷古墳	100m <sup>2</sup>	S62 10/9～11/12	保田 義治	昭和62年度(既刊) 1
9	大畠遺跡	18,000m <sup>2</sup>	S61%～%、S62%～% S62%～%、S63%～%	行田 裕美 小郷 利幸 保山 義治	平成2年度 ?
10	小原遺跡	12,000m <sup>2</sup>	S61%～S62%、S62%～% S62%～S63%	行山 裕美 小郷 利幸 木村 博子	平成2年度 8

## 2 周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原・金井地区に位置する。この一帯は標高130~150mの丘陵と比高差30~50mの平野部が樹枝状に入りこんだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な部分である。



第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図（S = 1 : 25,000）

- |                  |            |           |
|------------------|------------|-----------|
| 1 津山中核工業団地造成地内遺跡 | 2 野介代遺跡    | 3 押入西遺跡   |
| 4 押入飯網神社古墳群      | 5 狐塚遺跡     | 6 能満寺古墳群  |
| 7 六ツ塚古墳群         | 8 玉琳大塚古墳   | 9 覗山遺跡    |
| 10 三毛ヶ池古墳群       | 11 猿塚古墳群   | 12 天神原遺跡  |
| 13 駄山古墳群         | 14 天王山古墳   | 15 和田古墳   |
| 16 飯塚古墳          | 17 美作国分尼寺跡 | 18 美作国分寺跡 |
| 19 長歎山古墳群        | 20 隅里古墳群   | 21 西吉田遺跡  |
| 22 金井別所遺跡        | 23 梶原遺跡    | 24 岡田遺跡   |

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのぼるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普遍的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西吉田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数軒から構成されるもので、集落研究、上巣の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環濠集落で著名な天神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内において最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上歟山古墳群が同一丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作國分寺、同國分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

(註1) 渡辺健治「津山市植木クズレ塚古墳」『古代吉備』第7集 1971年

第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

1. 津山中核工業団地内遺跡	
2. 野介代遺跡	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
3. 押入西遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
4. 押入飯岡神社古墳群	河本 清・橋本惣司・柳瀬昭彦「押入飯岡神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973年
5. 猿塚遺跡	河本 清「猿塚遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集1974年
6. 鹿島寺古墳群	今井 克「原始社会から古代国家の成立へ『鷲山市史』第1章泰始・古代1972年」
7. 六ツ塚古墳群	今井 克「六ツ塚古墳群調査昭報」津山市文化財調査昭報3 1962年「六ツ塚古墳群」津山市文化財調査昭報No.4 今井 克「六ツ塚1分鏡調査昭報」津山市文化財調査昭報7 1966年 近藤義郎「岡山県津山市六ツ塚古墳群」『日本考古学年報15』1967年
8. 玉串大塚古墳	今井 克「津山市川崎玉串大塚調査報告」津山市文化財調査昭報第1集1960年
9. 親山遺跡	淡 哲夫「八出巖山遺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集1977年
10. 三毛ヶ池古墳群	
11. 車塚古墳群	「井門車塚古墳」『津山の文化財』1983年
12. 天神原遺跡	河本 清・橋本惣司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』1975年
13. 歆山古墳群	「日上歟山古墳群」津山市埋蔵文化財調査昭報No.4 今井 克・近藤義郎「群集墳の飛行」『古代の日本4』中国・四国1970年「日上天王山古墳と歟山古墳群」『津山の文化財』1983年
14. 天王山古墳	「日上天王山古墳と歟山古墳群」『津山の文化財』1983年
15. 和田古墳	行田裕美「日上和田古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集1981年
16. 飯塚古墳	「国分寺飯塚古墳」『津山の文化財』1983年
17. 美作國分尼寺跡	淡 哲夫「美作國分尼寺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集1983年
18. 美作國分寺跡	淡 哲夫・安川豊史・行田裕美「美作國分寺跡発掘調査報告」1980年
19. 長戻山古墳群	河本 清「美作考古学の現状と課題」『古代吉備』第2集1971年 今井 克「原始社会から古代国家の成立へ『津山市史』第1章泰始・古代1972年」
20. 隠里古墳群	渡辺健治「美作隱里箱石古墳調査報告」『古代吉備』第2集1971年
21. 西吉田遺跡	行田裕美「西吉田遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集1985年
22. 金井別所遺跡	行田裕美・保田義治・小郷利申「金井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集1988年
23. 梶原溝跡	田中 満・井上 弘「梶原溝跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1971年
24. 岡田遺跡	1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施 報告書未刊

### III 調査の経過

#### 1. 調査に至る経過

クズレ塚古墳及び崩れ塚古墳群（1～4号墳）の内、前者のみが周知の遺跡であった。クズレ塚古墳に関しては、1952年に部分調査がなされており横穴式石室に陶棺を持ち須恵器・土師器などが出上している事が知られている（註1）。しかし、墳形・横穴式石室の全容など詳細は不明であった。そのため、古墳の全容を知るため約200m<sup>2</sup>にわたる調査区を設定し調査に入った。また、5m間隔で幅2mのトレンチによる確認調査で、クズレ塚古墳と同一丘陵の高所に箱式石棺の蓋石や側石などが確認された。しかし、これら周辺には古墳と思われる高まりが見られず、箱式石棺などの群集の可能性が示唆できるため全面調査に至った。なお、これら箱式石棺などはいずれも古墳の主体部となった。この崩れ塚古墳群の調査区は、約1400m<sup>2</sup>である。

（註1）渡辺健治「津山市植木クズレ塚陶棺古墳」「古代吉備」第7集 1971年

#### 2. 調査経過

昭和62年8月6日、クズレ塚古墳にT字にあぜを残し、作業員の人力で表土剥ぎを行う。8月10日、前回調査の部分を掘り下げると陶棺が無残な姿で出土した。この事から、前回調査から今日に至るまでの間に再度手が加えられている。そして石室を中心に3方向にトレンチを入れ周溝を確認し、石室の残部も掘り下げる。周溝を掘る段階で一部下層から焼けた礫が数個確認され、古墳の下層にさらに別遺構がある事が予想された。8月26日、石室残部の精査の結果、須恵器・耳環等が出土。石室の全容も明らかとなる。8月28日から崩れ塚古墳群の調査も並行して行う。バックホーによる表土剥ぎの結果、箱式石棺は確認調査時の4基（内1基は石蓋土壙墓）以外には見つからず、各々を古墳の主体部とし、上部から1号墳と呼び調査に入った。9月14日から各々の主体部を中心に十字にトレンチを入れ周溝を確認する。10月6日にはクズレ塚古墳の調査をほぼ終え、下層遺構の調査に入る。下層から焼けた礫と縄文土器とが散在的に出土したため、調査区を一部西側へ拡張して精査を行う。10月14日、崩れ塚古墳群の全体写真を撮り、11月4日にはクズレ塚古墳の下層の調査も終了し、機材を次の現場へ運ぶ。

#### 3. 調査体制

発掘調査は、津山市教育委員会が主体となり実施した。調査主体は下記の通りである。

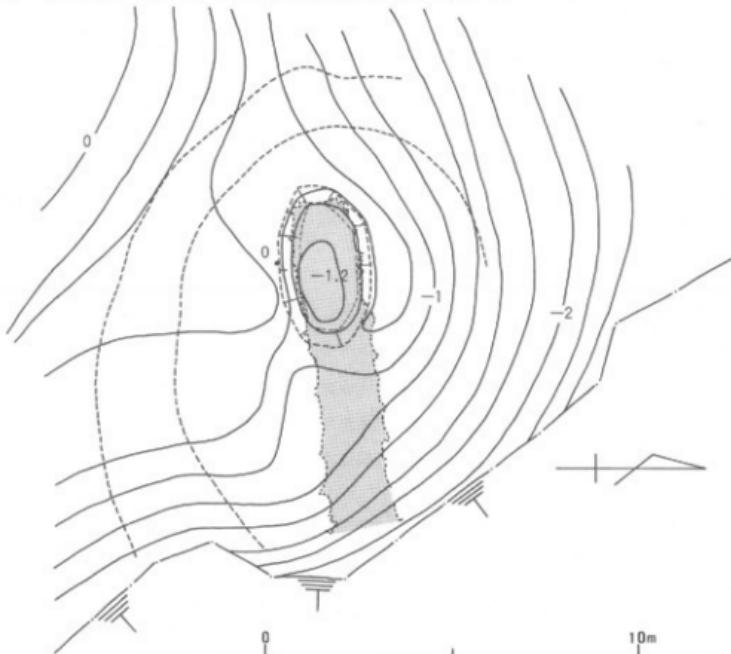
発掘調査主体 津山市教育委員会 教育長

福島祐一（～H1.6.30）

タ

萩原賢二（H1.7.1～）

教育次長	藤田公男
参事兼文化課長	内田康雄（～S 63. 3. 31）
タ	須江尚志（S 63. 4. 1～）
文化係長	柳山三千穂
調査担当	主 事 行田裕美
	主 事（調査時は埋蔵文化財調査員）小郷利幸
整理担当	タ
	タ
整理員	杉山紀子、飯田和江、野上恭子 光永純子、日笠月子、赤松百合子
発掘作業員	芦田露子、安藤 荣、安藤 猛、稻谷正一、稻谷美恵、小林稔代、下山政夫 下山よし子、藤島喜一、森 康、池口隆広、大石一政、小林豪貴
また、発掘調査時の調査指導をはじめ、整理作業及び報告書作成にあたり、下記の方々から 多大なる御指導・御教示を賜り記して厚く感謝の意を表します。	
泉 拓良、稻田孝司、大澤正己、鎌木義昌、河本 清、小林博昭、近藤義郎、下澤公明 土居 徹、新納 泉、平井 勝、水内昌康、安川豊史（敬称略）	



第9図 クズレ塚古墳調査前墳丘測量図 (S=1:150、トーン部分が横穴式石室)

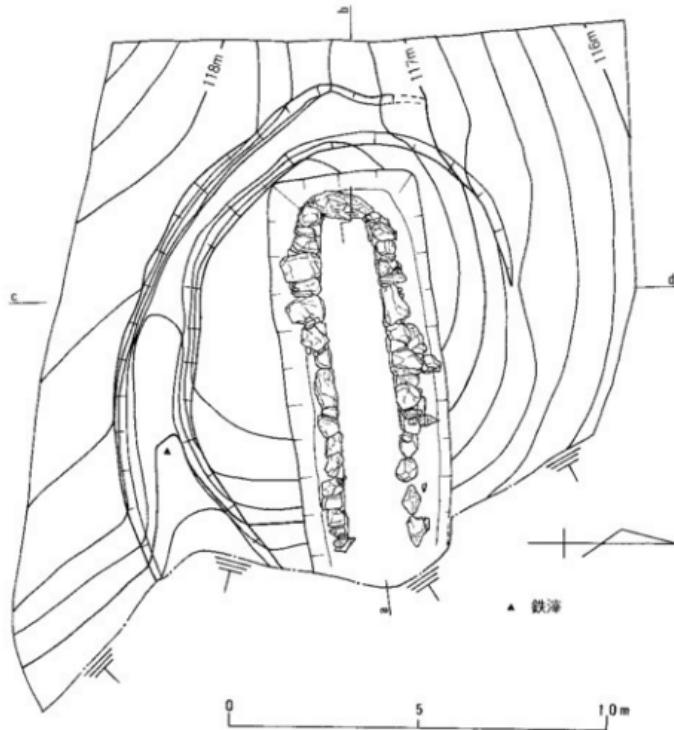
## IV 調査の記録

### 1. クズレ塚古墳

#### (1) 立地と調査前の状況

クズレ塚古墳は岡山県津山市金井字崩レ塚961-6番地に所在する。

工業団地内のほぼ中央に、植木の集落に向かう南東方向の大支谷がある。この谷には相対峙する形で多くの丘陵が樹枝状に派生し、複雑な地形を形成している。この辺りは、標高130~150m、平野部との比高差は、30~50mを測る。本古墳はその中で、工業団地内南端部に位置するほぼ南北に派生した丘陵の先端部に立地する。また、石室入口直下は現在比高差6.6m程の崖となり、眼下に耕作面が形成されている。本来はもう少し緩やかな斜面であったと思われる。



第10図 クズレ塚古墳墳丘測量図 ( $S = 1 : 150$ )

本古墳は、周知の遺跡であった。調査前の状況は、前回調査部分が若干のくぼみを残し、さらに奥壁の石の先端が露出しその一部は破損していた。また、周辺山側には周溝と思われるくぼみもほぼ円形状に観察された。標高は、116~118mである。

## (2) 墳丘と周溝

本古墳は、山側部分に円形に周溝をめぐらした、ややいびつな形をした円墳である。墳丘の規模は東西約12m、南北9m、周溝を含めると東西約13.5m、南北12mを測りほぼ横円形を呈する。また、周溝底部からの高さは、盛土の残りが悪く最大で0.8m程である。

盛土（第11図3）も多いところで25cm程残存していたが、そのほとんどが除去されている。また、淡茶灰色土の單層である。

周溝は山側部分にのみめぐり、北側斜面では斜面に沿って自然解消する。周溝は最大幅2.5m、深さ0.55mを測り断面はやや角ばったU字形を呈する。西側では2層、南側では3層の堆積を基本とする。また、東側については現在崖に接しており、本来はもう少しちぎっていたものと考えられる。なお、南側周溝内より鉄滓1点が、やや浮いた状態で出土した（第10図▲）。

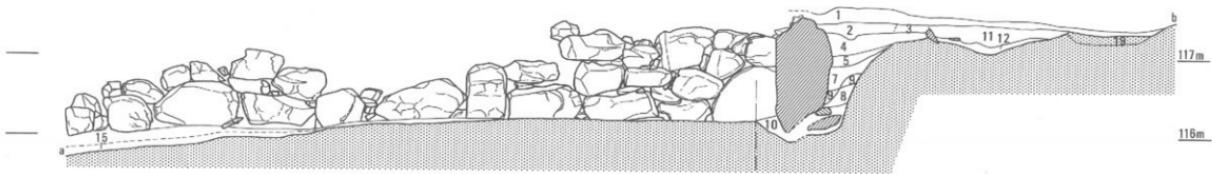
## (3) 埋葬施設

埋葬施設は東に開口した無袖の横穴式石室である。石室の握り方は、幅4.3m、全長約10.5mの隅丸方形で、南西隅では一部周溝上端と接する形となっている。奥壁部と北側壁の一部のみが2段掘りである。この部分では約70cm程掘り下げいったん平坦面をつくり、さらに2段目として約30cm程掘り下げている。そしてこの部分に基底の石をそえるのであるが、他の箇所はこの1段目と2段目との境の平坦面をもたない。石室中軸線の方向はN83°Eである。使用している石材は、片岩系の石と思われる。

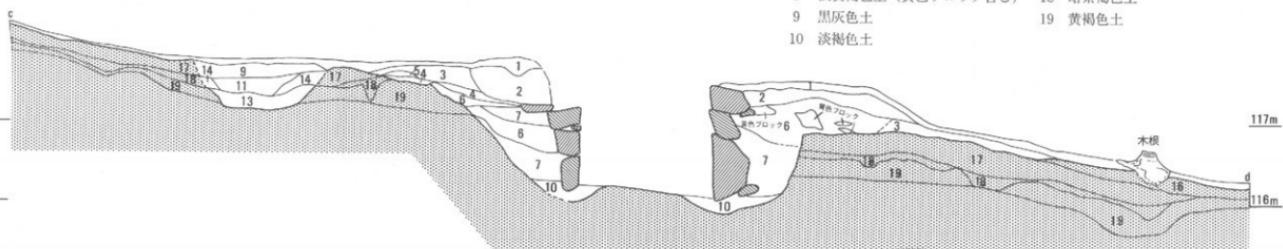
石室床面での計画値は、全長9m、奥壁幅1.1m、最大幅1.8m、平均すると幅は1.6m前後であり、奥壁に向かってやや先細になる平面プランである。石室高は、天井石が一切残っておらず明確でないが、残存する奥壁部で最大1.5mを測る。

奥壁は残存部で高さ1.5m、幅1.8m、厚さ0.7m程のやや扁平な一枚石の整った平の面を使用している。なお、前回調査の記録によれば高さ1.5m以上との記述があり、側壁の構造などから考慮しても高さは1.5m以上はあったものと考えられる。裏ごめには40cm程の扁平な石を数個根石に使用し、埋土は地山ブロック（黄色・黒灰色）混じりの互層である。

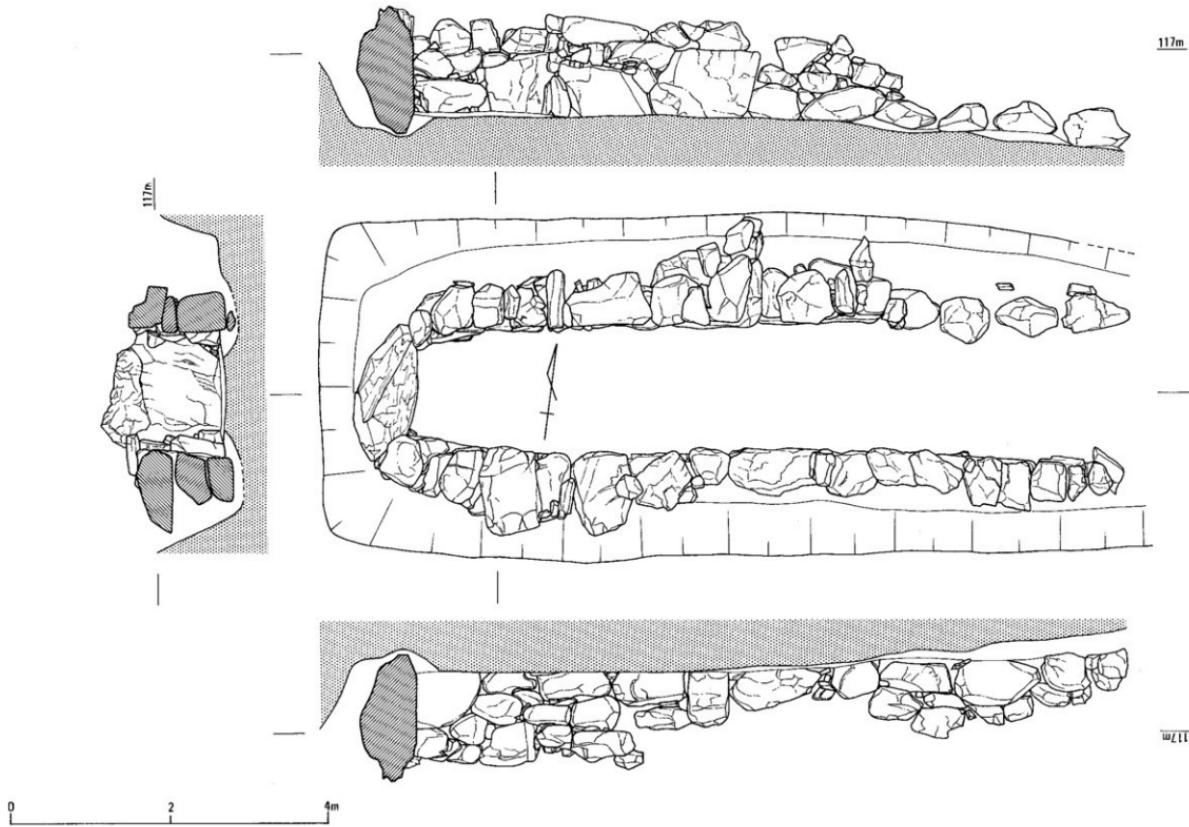
北側壁は、ほぼ直線的に配列され全長8.75mを測る。奥壁から4mまでは、奥壁に接する部分を除き大形の石の整った面を使用した広口積を基底に使用し、2段目からは横口ないしは小口積みを多用している。2段目は、高さ約1.2mには保たれておりこの上にもう1段あった事が前回の調査からわかっている。しかし、残り半分の入口部分は非常に残りが悪く、あまり形の整っていない小形の石を基底に使用している。なお、平面プランでは中央部分で一部外側にはみだす形に積まれている箇所があるが、これは別段特殊な施設とは考えられない。



- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 1 表土              | 11 黒灰色土（黄色ブロック含む） |
| 2 暗茶灰色土（搅乱土）      | 12 黄白色土           |
| 3 淡茶灰色土（盛土）       | 13 暗黄白色土          |
| 4 暗黃灰色土           | 14 暗茶褐色土          |
| 5 淡黑灰色土           | 15 黒灰色土（須恵器含む）    |
| 6 淡黒灰色土（黄色ブロック含む） | 16 暗茶褐色土          |
| 7 淡黄褐色土           | 17 黑色土            |
| 8 淡黄褐色土（黄色ブロック含む） | 18 暗茶褐色土          |
| 9 黑灰色土            | 19 黄褐色土           |
| 10 淡褐色土           |                   |



第111図 墳丘断面図 ( $S = 1:50$ )



第12図 横穴式石室平・断面図 (S = 1 : 50)

南側壁も同様に直線的に配列され、全長8.8mを測る。

石の積み方は、北側とは若干異なり、奥壁に接する部分以外は、50cm程の面をもつ石の横口積みでこれを基底に敷き、その上にもほぼ同規模の石を2~3段に積み上げ、北側同様高さを上面で約1.2mに揃えている。さらにもう1段あった事もわかっている。しかし、この状況も奥壁から2.5mまでで、他はほとんど基底石しか残っていない。入り口部分の基底石の状況は北側と同様である。両側壁と奥壁が接する部分の内側の基底には、いずれも小形の石をはめこみ隙間を充填して補強している。

#### (4) 埋葬主体

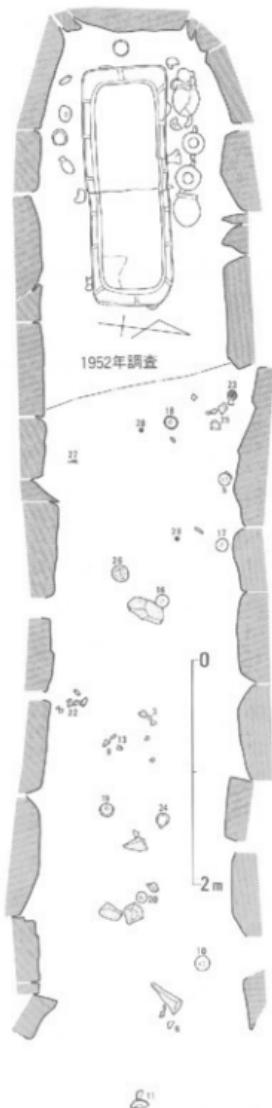
横穴式石室内には、陶棺が1基存在する。また、耳環などが床面より検出されたため、鉄釘は発見されていないものの木棺の存在が考えられる。

陶棺は、石室主軸線上奥に位置する。今回の調査では、現位置は確認できなかったものの、前回の記録から位置を復元することができる(第13図上)。また、今回調査で陶棺東の北側壁寄りに、耳環2個と須恵器とが集中して出土している。この部分に木棺の存在が考えられる。しかし、その他の部分では残りが悪く、石室内に散在する石も棺台とは特定できず、他の埋葬主体の確認には至らなかった。

#### (5) 遺物の出土状況

都合上、前回の調査(陶棺部分)と今回調査の部分に分けて説明を加える。なお、前者に関してはすでに報告されているので概略を述べる。陶棺部分(第13図上)では、床面から須恵器、土師器が出土した。この内土師器は、瓶と壺が対となった2組が、北側壁との間に置かれていた。瓶はいずれも口縁部を下にして置かれており、東側の壺の倒れ方から、瓶と壺を組み合わせて、それを逆さまの状態にして廻轉したのではないかと想定している。また、須恵器は周辺から出土し、高杯の一つは立ったままの状態であり杯の蓋と身がセットになっていたものは無かったとする。

陶棺の脚の下に入り込んでいたのがどれくらいあったかは



第13図 遺物出土状況 (S=1:50)  
陶棺部分は、原図を一部修正加筆

疑問が残るもの全体的な須恵器の形状から、この部分に数次の埋葬があった事が考えられる。これが陶棺における追葬なのか、あるいは陶棺以前に別の埋葬があったのかは即断できない。この事に関しては後述する。その他の遺物として、排土中より管玉1、尖根式鉄釘1、刀子2、不明鉄器1が出土している。

今回調査部分は、先述のように横穴式石室の残りが悪いため床面遺物も少なく、さらに破片となっているものが多い。出土遺物は、須恵器、耳環、鉄釘、鉄滓である。まずまとまって出土したのは、北側壁中央部で耳環(28、29)と須恵器杯蓋(5)、杯身(16、17、18)、提瓶(23、25)、平瓶(26)が中央部分に空間を残しそれをとりまく形で出土した。この中央部に木棺の存在が想定できる。しかし、鉄釘は出土していない。これに対する南側壁側で、鉄釘(27)が単独で出土した。この北側木棺に伴うものであろうか。さらに入口部分では、破片となっているものが多いが、中には提瓶(24)や有蓋高杯蓋(19)など完形品も數点散在的にみられる。この内19の蓋は陶棺部分で出土した有蓋高杯の蓋である。なお入ロ部分には黒灰色土(第11図15)が堆積し、この中にも須恵器が多数含まれていた。杯が多く杯蓋(1、2)、杯身(6、8、10、12)などで、本古墳出土の須恵器の中では古手のものである。この事からこれら土器は、追葬時にかきだされたものか、あるいは墓前祭祀的なものであろう。また、入ロ直下は現在崖となっており、この部分の精査をおこなったが、墓道などの確認には至らなかった。その他、掘り方内排土中より耳環(30)が、また周溝内からは鉄滓1個がやや浮いた状態で出土した。

#### (6) 出土遺物

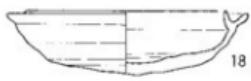
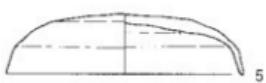
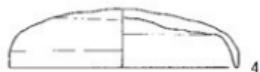
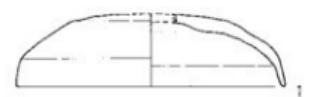
前回の調査で、上師質亀甲形陶棺1、須恵器25(杯蓋12、杯身7、高杯1、有蓋高杯2、同蓋1、提瓶2)、上師器4(壺2、瓶2)、管玉1(碧玉製)、鉄器4(尖根式鉄釘1、刀子2、不明1)が出土し、今回の調査では上記陶棺以外に須恵器26、鉄器1、耳環3、鉄滓1が出土した。なお、前者陶棺以外の土器に関しては、第35~37図、観察表(第5表)を参照されたい。また、今回出土の須恵器は、実測可能な26点以外にも杯の破片が数個体分確認できる。

##### a 須恵器(第14~16図)

今回出土の須恵器で実測可能なのは26個体を数え、その内訳は、杯蓋5、杯身13、有蓋高杯1、短頭壺蓋1、壺1、高杯1、提瓶3、平瓶1である。なお、詳細は観察表(第3表)を参照されたい。

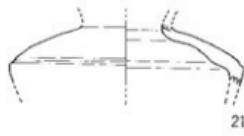
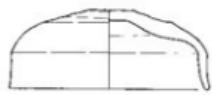
##### 杯蓋(第14図1~5)

5個体と数は少ないものの口径12.2cm~15.5cm、器高3.1cm~4.0cmと幅があり、いくつかに分類できる。分類は次項にゆずる。天井部はやや丸みを持ちヘラ切り未調整である。その他の部分の調整はヨコナデである。1、2は破片による復元である。口径の割りには器高が低く、なおかつ摩滅が著しいため天井部分の調整は不明であり、色調も乳灰白色で焼成もやや不良と他とは異なる。



0 10cm

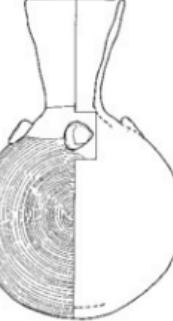
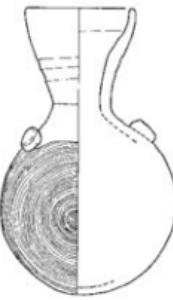
第14図 出土遺物 1 (S = 1 : 3)



19

20

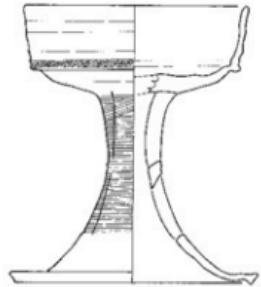
21



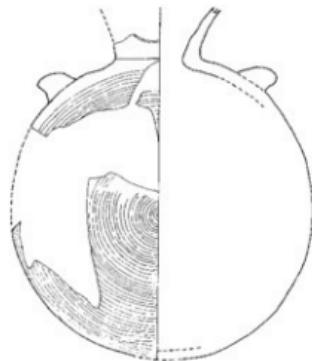
22

23

0 10cm

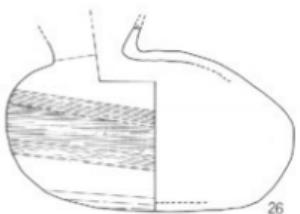


24

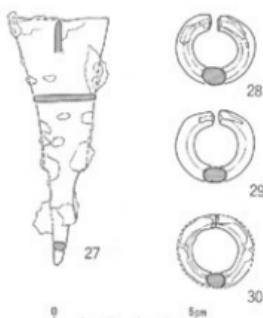


26

第15図 出土遺物2 (S = 1 : 3)



第16図 出土遺物3 (S = 1 : 3)



第17図 出土遺物4 (S = 1 : 2)

### 杯身 (6~18)

口径は10.5cm~13.4cm、器高3.4cm~4.0cmで、底部はやや丸みをもつものと平らなものとがある。底部は3分の1程に回転ヘラ削りを施すもの(8, 9, 10, 11)、ヘラ切りのままのものとがある。9には成形時のタタキの当て具痕が内面にみられる。

### 有蓋高杯蓋 (19)

蓋のみ出土した。前回の調査で、有蓋高杯2個とその蓋が1個しか出土していないので、このどちらかとセットになるのであろう。天井部に扁平なつまみがつき、天井部3分の2は回転ヘラ削りを施し、口縁部とのさかいに凹線がめぐる。

### 短頸壺蓋 (20)

口径が小さいので、短頸壺の蓋と判断した。なお短頸壺は出土していない。

### 翫 (21)

埋土中より出土した破片である。細片のため円孔も見られないが形態から翫と判断した。肩部に沈線がめぐる。

### 高杯 (22)

杯部下部に列点文を脚部にはカキ目を施す。長脚2段で3方に1mm弱の細い透かしがある。

### 提瓶 (23~25)

3個体あり、大型でやや鉤状に屈曲した耳を両肩にもつもの(25)、小型で耳が扁平な張り付け状を呈し形式化したもの(23, 24)とがある。後者は耳を3個もち、カキ目側に1、反対側に2とその逆の2種類がある。

### 平瓶 (第16図26)

口縁を一部欠損するもののほぼ完形で、逆様の状態で出土した。上部に扁平な張り付け状の耳が2個つく。その耳の間にヘラ状工具による記号「|」らしきものがつく。胸部にカキ目を、底部は回転ヘラ削りを施す。

### b 鉄器 (第17図27)

鉄器は有茎平根盤頭式の鉄鎌1点である。

### 鉄鎌 (27)

茎部から刀部に向かって直線的に幅を広げる。断面は長方形を呈し、茎の部分で折れて重なっている。現長8.7cm、刃部幅3.4cm、厚さ3mmを測る。

c 装身具（第17図28～30）

装身具として耳環が3個出土している。石室内床面から2個と排土から1個である。

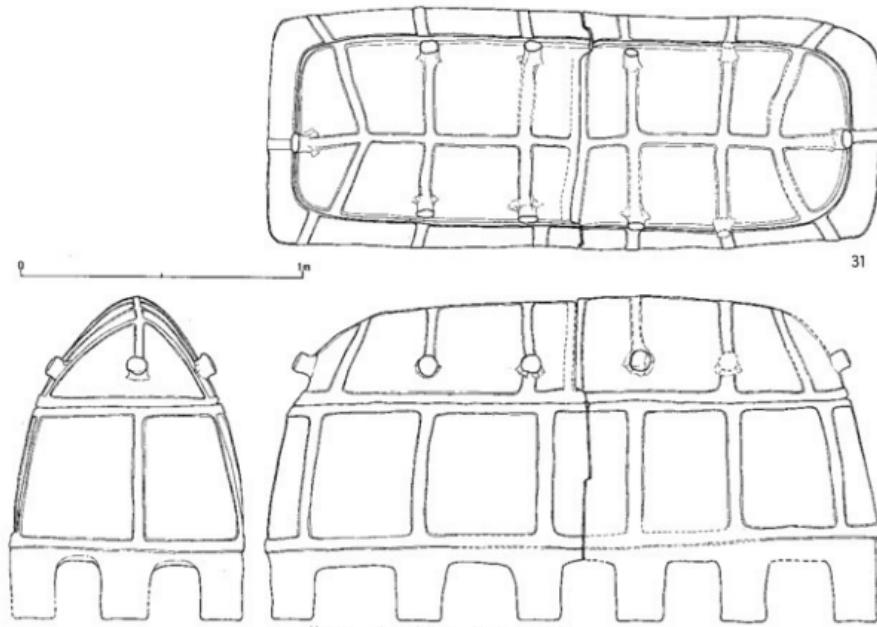
耳環（28～30）

28、29は銅地に銀張りしたものである。30は腐食化が著しく残りが非常に悪い。いずれも厚さ6～8mmの管を、直径2.8cm程に環状にしている。

d 陶棺（第18図31）

陶棺は土師質の亀甲形で、石室の一番奥から1棺出土した。前回調査では、陶棺以外の出土遺物に関しては取り上げ、陶棺は元のまま埋めもどされた。しかし、その後に手が加えられ、陶棺は現位置を保たずなおかつ破損が著しかった。さらに、前回調査時から蓋の半分はすでに紛失していたが、今回の調査でその半分の蓋もほぼ復元する事ができた。全長2.2m、幅0.85m、高さ1.15mを測り、陶棺としては大形の部類である。脚は直径15cm前後、高さ20cm前後の円筒形を呈し、6本ずつ3列に配されている。身・蓋の外面には赤色顔料が塗られている。

身は上端で長さ2m、幅0.65m、内側底で長さ2.1m、幅0.64mを測る。内面はヘラ状工具



による横方向のナデである。また、身蓋一体造りのため上端面にはヘラによる切断痕が、幅約1.5cm単位で残る。中央部でクランク状にきれいに切断されている。

蓋は薄鉢状を呈し、突起が5個ずつ計10個付けられている。突起ははめこみ式であり、両先2個の内面にその痕跡を顕著に残す。突起に相対する形で、幅4cm程の突帯があげられ、突起の下部では一部めぐらぬ箇所もある。また、突帯をめぐらす所にあらかじめ2~3本の線をヘラ状工具であらく引いて、突帯を取り付ける際の目印としている。蓋も2分されており受部と突帯状に張り付けた重ね部とからなっている。内面の調整はナデである。制作時の最終的な作業穴、「封じ孔」(註1)は確認していない。おそらく欠損部分に存在していたのだろう。

#### 6 鉄滓(図版8-3)

1個出土し、50mm×60mm×30mm、重さは145g、分析の結果鉱石製練滓である(註2)。

(註1) 村上幸雄・橋木惣司「亀甲形陶棺の制作工程について」『考古学研究』26-2 1979年

(註2) 分析は、新日本製鉄㈱の大澤正巳氏による。成果はあらためて発表される。

#### 土器

(出土地所地番、第1回の動画)

番号	器種	口径	高さ	ヘラ跡	胎土	地成	色調	腹厚度	出土場所	備考
1	平盤	14.4	3.9	-	2mm以下砂粒	やや不均	鉄青白色	約1/4	石室内部	片側小頭、内側タコナデ
2	-	15.5	14.0	-	1mm以下砂粒	-	-	約1/3	石室入口	-
3	-	13.5	3.7	-	真	鉄青灰褐色	約1/2	石室内部	3	
4	-	12.2	3.1	-	-	鉄青灰褐色	ほぼ定形	-	ヘラ切り、ココナデ	
5	-	12.4	3.2	-	2mm以下砂粒	-	真	約1/2	-	3.5
6	折口	13.4	2.4	-	1mm以下砂粒	やや不均	鉄青白色	約1/4	-	小頭、タコナデ
7	-	13.4	3.6	-	0.5mm以下砂粒	真	鉄青灰褐色	約1/8	石室壁	-
8	-	11.2	3.9	左	1mm以下砂粒	-	明灰白色	約1/2	石室入り口	箱板へう振り、ヨコイテ
9	-	12.2	3.7	左	-	-	真	約1/8	石室内部	門板へう振り、ミタガ、表面サナギ質
10	-	11.6	2.6	右	2mm以下砂粒	真	鉄青白色	約1/2	-	門板へう振り、ココナデ
11	-	12.3	4.0	左	1mm以下砂粒	真	好	約1/2	石室入り口No1	-
12	-	12.4	3.9	-	-	鉄青灰褐色	約1/3	石室入り口	ヘラ切り、ヨコイテ	
13	-	12.4	3.8	-	2mm以下砂粒	やや不均	鉄青白色	約1/4	石室内部3	不規則、ヨコナデ
14	-	11.4	3.5	-	1mm以下砂粒	真	好	約2/3	石室壁	ヘラ切り、ココナデ
15	-	11.5	3.7	-	-	鉄青白色	約3/4	-	-	-
16	-	11.0	2.9	-	-	鉄青灰褐色	定	形	石室内部6	-
17	-	10.7	3.7	-	2mm以下砂粒	-	-	約1/2	-	-
18	-	10.5	3.5	-	1mm以下砂粒	-	鉄青灰褐色	約1/2	-	立んでいる
19	有蓋萬仟型	12.4	2.2	左	-	-	鉄青白色	約1/2	-	-
20	有蓋吸水型	10.6	4.1	-	-	-	鉄青灰褐色	約2/3	-	ヘラ切り、ヨコナデ
21	瓶	-	-	-	-	灰白色	小	片	石室壁	ヨコイテ
22	高井	11.1	14.8	-	0.1mm以下砂粒	-	淡黄褐色	約3/4	石室内部22	内側空・造り目、ヨコナデ、造り目
23	罐	5.8	19.3	-	1mm以下砂粒	-	鉄青灰褐色	約1/2	-	カキ目・タタリ目、ヨコナデ
24	-	5.2	17.0	-	2mm以下砂粒	-	鉄青灰褐色	ほぼ定形	-	タタリ目、ヨコナデ
25	-	-	(16.0)	左	-	-	-	約2/3	-	タタリ目・内側へう振り、ヨコナデ
26	子瓶	(10.0)	左	-	-	鉄青灰褐色	ほぼ定形	約1/2	左側	タタリ・内側へう振り、記号あり、ヨコナデ

#### 鉄器

番号	器種	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	出土場所	備考
27	鍔	3.4	0.3	16	-	石室内部No29	直筒で丸出しとなっている。

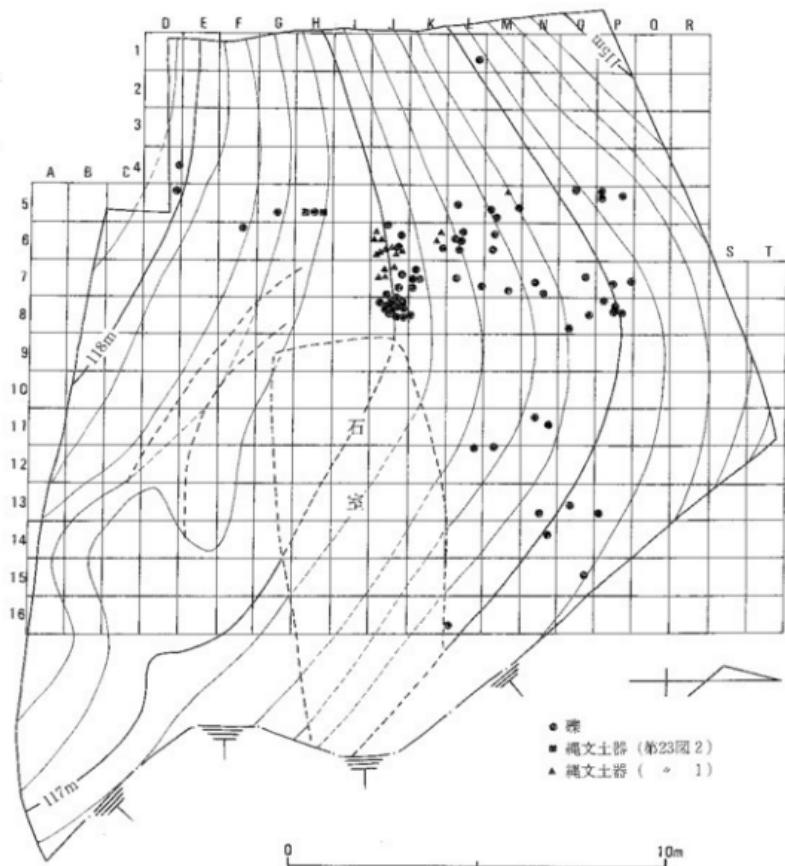
#### 耳環

番号	材質	外径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土場所	備考
28	銅	2.8	1.6	0.60	17.5	石室内部No28	無
29	-	2.8	1.5	0.35	13.5	No29	-
30	-	2.7	1.7	0.35	8.5	排水沟	表面が黒い

第3表 出土遺物観察表

### (7) 下層遺物の出土状況

古墳の周溝調査時に、下層に別遺構の存在が考えられていた。そのため古墳調査後、盛土を除去しさらに掘り下げていった。このあたりの土層は周辺とは異なり、古墳の地山は黒色土で、その下にさらに2層の堆積がみられた。下層の基本土層は、黒色土層（第11図17）、暗茶褐色土層（同18）、黄褐色土層（同19）の3層である。この内、前2者からは出土遺物は無かったが、3層目の黄褐色土層中から縄文土器片と焼けた礫などが出土した。調査区には、1m間隔でグリッドを設定した。グリッドは南北軸をアルファベットで東西軸を数字であらわし、アルファベットと数字の順に表記する。出土したのは縄文土器片23片と焼けた礫など78点である。前者



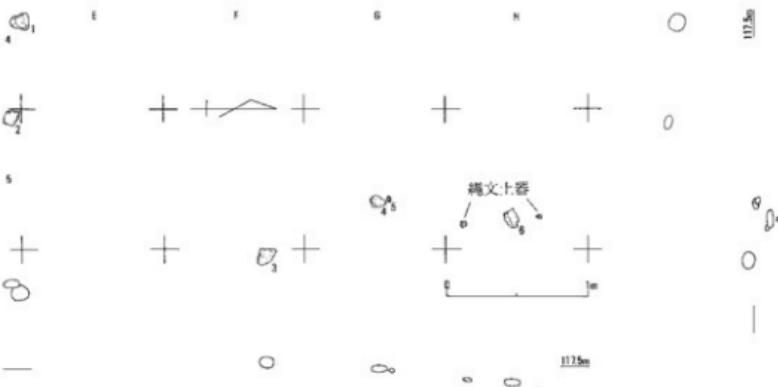
第19回 下層遺物出土状況及びグリッド配置図 ( $S = 1 : 150$ )

は、H-5、J-6・7、K-6、M-5から2個体分の小片ではあるがほぼまとめて出土した(第19図▲・■)。また、礫は焼けたものとそうでないものとが存在するが、その比率は焼石が91%でほとんどを占める。礫はほぼ調査区の北・西側に集中し、ここではこれらを1つの礫群(まとった礫の集積)として捉え、以下概説を加える。第20図は、調査区南東側で縄文土器片(第23図2)と礫の出土状況である。調査区の斜面高所に位置し、土器片は2片以外には出土していない。礫はすべて焼けている。調査区北西側(第21図)は、礫が最も集積している所である。無文の縄文土器片(第23図1)と焼けた礫などからなり、J-6~8にはほぼ集中する。この礫の中には接合可能なものや、非常によく焼けているものが多い。また、調査区の北東側(第22図)でもやや散在的に礫のみが出土した。この礫は大きめのものが多く、焼けたものがほとんどである。出土した礫は、いずれも斜面堆積で掘り込んだ遺構などは伴わない。

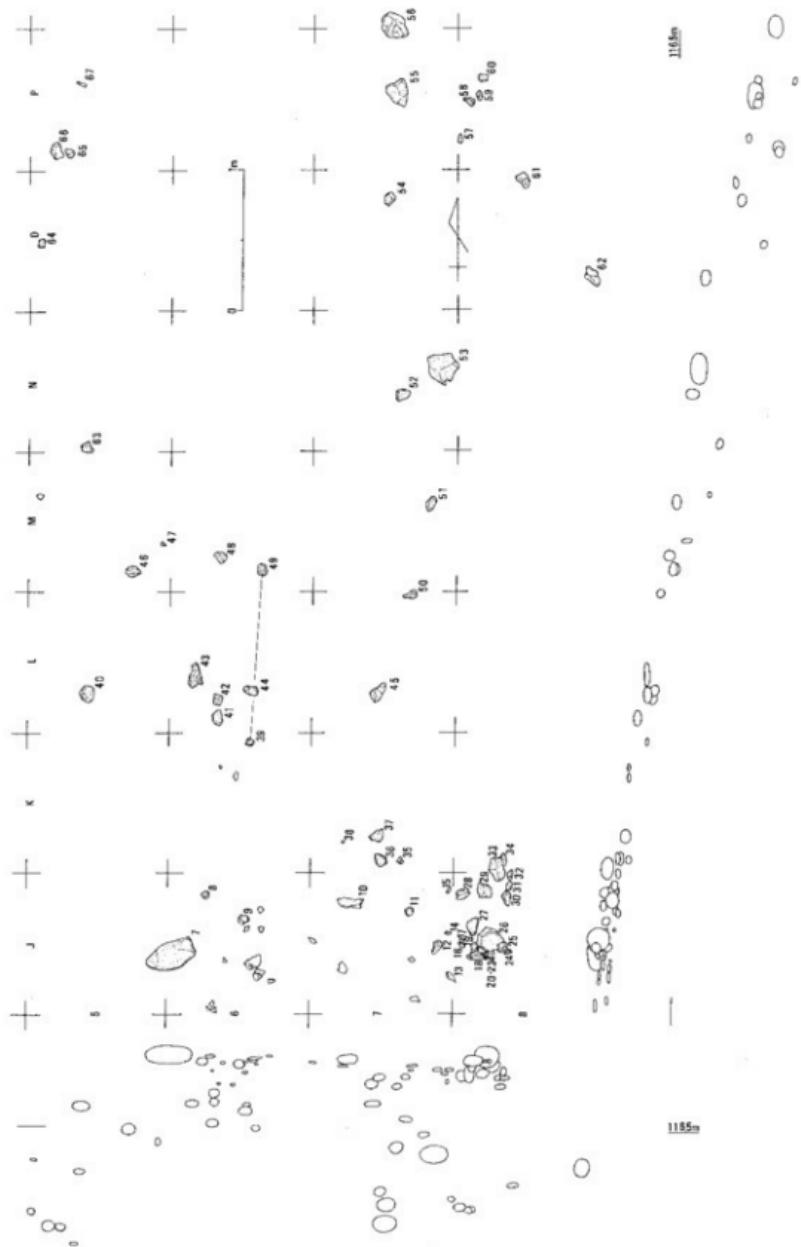
以上礫などの分布をみると、いくつかのブロックに分ける事も可能かもしれない。しかし、石室築造時に破壊されている可能性や、一部集中して分布するものの散在的なものが多く、縄文土器の個体数も少ないので、ここでは1つの集積として解した。焼けた礫の他に焼土面、炭の分布などは確認されなかった。なお無文土器は、層位的に考えてこれら礫群に伴うものである。また、調査区南東側A-13~A-16、A-13~D-13四方が、ややえぐれた状態に等高線が回っている。しかし、ここに別遺構は確認できず緩傾斜する自然地形と判断した。

#### (b) 下層出土遺物

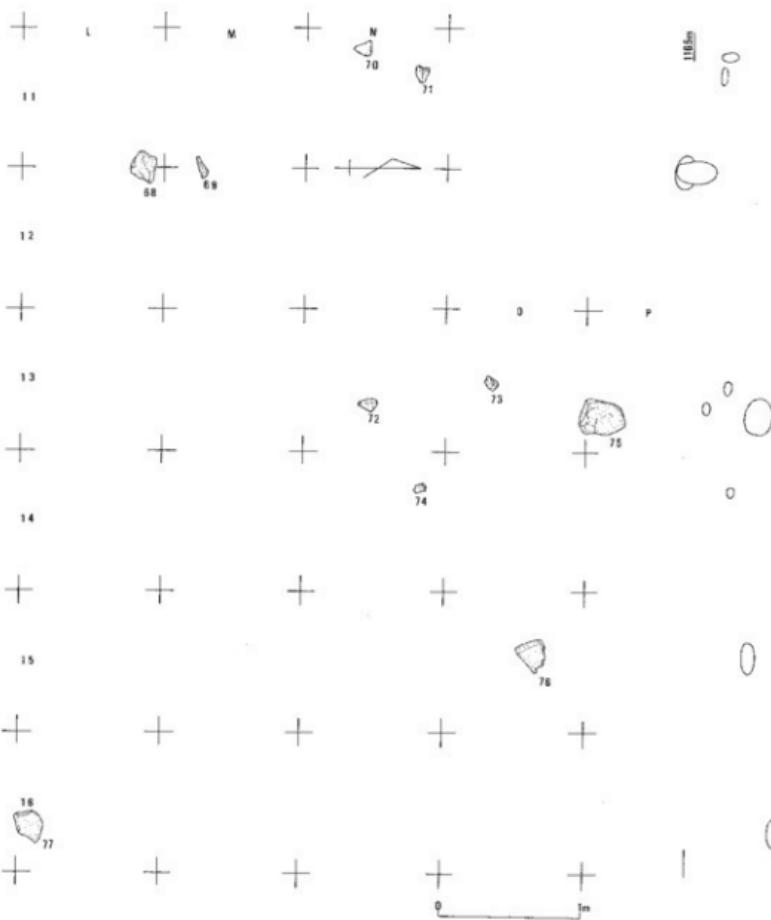
下層遺物として縄文土器2個体分の小片と礫78点がある。無文の縄文土器(第23図1)は、深鉢形土器で底部を除きほぼ復元することができる。復元径約27.2cm、残存高20.3cm、口縁部はやや外反し胴張りのプロポーションである。底部は出土していないため不明である。厚さは胴部で1~1.4cm程度である。外面は凹凸がみられるものの平滑で、口縁部に一部ススの付着が



第20図 下層遺物出土状況1 (S=1:40、番号がないのは縄文土器)



第21図 下層遺物出土状況2 (S = 1 : 40、番号がないのは縄文土器)



第22圖 下層遺物出土狀況 3 (S = 1 : 40)

みられ胴部下部にはヘラ状工具によると思われる、縱方向の線刻が観察できる。現状では4~5本みられ欠損部に続く事からさらに下部にも存在していた可能性がある。胎土は砂粒を多量に含み、色調は淡褐色で残存状況も良好である。

突帯を持つ繩文土器（第23図2）は、縦4.9cm、横6.6cmの小片で外面に張り付け状の突帯が4条確認でき、各突帯間は約1cm程である。器壁の厚さは、5mm程であり、胴部から口縁部に向かってやや内傾する器形である。内面はナデであり、胎土に砂粒を多量に含むため表面は粗雑である。色調

は暗黃褐色で残存状況も良好である。なお、礫については観察表（第4表）を参照されたい。



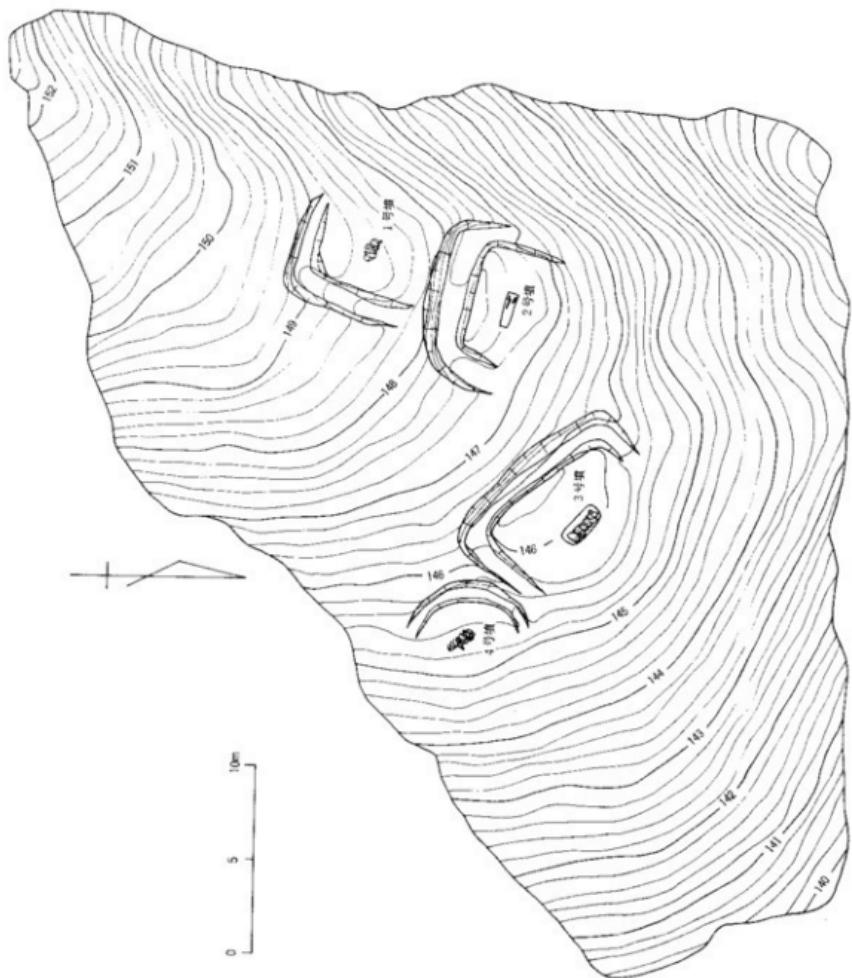
第23図 下層出土遺物 (S = 1 : 4)

Table 4: Excavation Survey Table for Lower Layer Artifacts (S = 1 : 4) (参照表)

番号	性質	大きさ	付石量 (kg)	裏面	施	番号	性質	大きさ	付石量 (kg)	裏面	施	番号	性質	大きさ	付石量 (kg)	裏面	施							
1	D-H-4	A-B	13.0	6.9	220	○	34	K-E	A-B	7.3	7.3	237	●	47	P-S	B	B	6.7	2.4	1.8	△			
2	D-2	A-B	11.5	5.3	280	○	25	K-T	A	5.2	4.6	1.0	80	50	L-H-32	H-A	H-A	19.5	18.0	12.0	700	×		
3	F-6	A	13.0	12.5	4.5	160	○	26	K-T	A	20.0	20.1	6.2	188	51	M-H-32	A	A	36.2	21.4	8.8	400	○	
4	G-3	A	13.0	12.5	7.6	2.0	230	○	37	K-T	A	11.0	9.0	3.1	410	52	N-11	A	A	31.5	24.0	10.7	450	○
5	G-3	H	13.0	3.4	4.1	2.2	90	○	38	K-T	A	2.5	2.3	2.1	25	53	S-11	A	D	16.2	10.7	5.0	420	△
6	H-3	A	13.1	9.3	5.5	7.9	○	39	K-E	A-B	0.1	0.1	4.1	100	54	N-11	A	A	11.0	11.2	6.0	110	○	
7	J-5-6	A	20.1	21.1	6.9	280	○	40	L-2	A	11.0	6.8	6.0	300	55	O-13	A-B	B	9.0	7.2	7.0	70	○	
8	J-6	H	8.0	6.0	6.4	5.2	300	×	41	L-6	A	10.0	7.0	5.9	20	56	N-24	A	A	9.0	5.0	5.0	200	○
9	J-6	A	8.0	6.0	6.4	5.2	280	×	42	L-6	A	8.0	6.2	4.0	400	57	O-P-13	A	A	31.0	29.0	12.0	1200	○
10	J-7	A	10.5	7.2	3.8	7.6	70	○	43	L-E	A	18.1	11.2	3.7	400	58	O-15	A	B	23.2	20.3	8.8	250	○
11	J-7	A	12.0	4.2	6.1	4.5	76	○	44	L-E	A	0.0	0.0	5.7	770	59	S-L-H-A	A	A	26.0	18.0	9.7	2400	○
12	J-7	A	10.0	9.6	8.0	8.0	99	○	45	L-7	A	3.0	0.3	4.1	530	60	L-I-A	A	A	18.0	0.0	0.5	400	○
13	J-7	A	14.0	12.0	7.6	5.0	79	△	46	M-6	A	9.5	9.5	5.0	620	61	凡例	石質:A	質B	8	0	0	0	
14	J-7	A	14.0	12.0	2.2	1.3	40	○	47	M-5	A	7.0	4.0	3.1	80	62	石質:A	質B	8	0	0	0		
15	J-7	A	14.0	2.4	2.8	2.2	40	○	48	M-6	A	1.9	7.8	4.4	520	63	黒褐色粘物	石質:A	質B	8	0	0	0	
16	J-7	A	14.0	4.5	3.8	2.2	48	○	49	M-5	A	7.5	8.2	4.3	280	64	部分的に赤化	石質:A	質B	8	0	0	0	
17	J-8	A	12.0	3.8	3.0	2.1	30	△	50	L-7-H	A	10.0	5.6	5.1	460	65	X	石質:A	質B	8	0	0	0	
18	J-8	A	12.0	10.0	7.5	2.5	80	○	51	M-7-T	A	8.7	7.3	5.9	470	66	赤化なし	石質:A	質B	8	0	0	0	
19	J-8	B	7.5	8.0	6.0	6.0	98	○	52	N-T	A	13.0	9.1	5.0	620	67	大きさ:A	8	0	0	0			
20	J-8	B	10.0	12.0	8.0	6.0	96	○	53	N-T	A	22.0	19.0	7.2	2000	68	大きさ:B	8	0	0	0			
21	J-8	A	10.0	12.0	8.0	6.0	95	○	54	O-T	A	9.2	8.3	6.5	720	69	大きさ:C	8	0	0	0			
22	J-8	A	10.0	12.0	8.0	6.0	94	○	55	P-T	A	18.0	18.1	9.9	1400	70	大きさ:D	8	0	0	0			
23	J-8	A	12.0	12.5	8.5	3.5	70	△	56	P-Q-T	B	17.0	16.1	10.7	4600	71	8	0	0	0				
24	J-8	A	10.0	12.0	7.9	6.9	60	○	57	P-E-T	A	9.9	2.5	4.0	290	72	0	0	0	0				
25	J-8	A	10.0	12.0	7.9	6.9	58	○	58	P-E-T	A	8.4	5.5	5.4	300	73	0	0	0	0				
26	J-8	A	12.0	10.0	15.9	6.2	790	○	59	P-E-T	A	7.5	2.5	4.7	180	74	0	0	0	0				
27	J-8	A	10.0	12.0	9.0	9.2	150	○	60	P-E-T	B	8.0	6.5	3.9	290	75	0	0	0	0				
28	J-8	A	10.0	12.0	6.0	6.0	520	○	61	O-E-T	A	11.5	7.0	3.3	290	76	0	0	0	0				
29	J-8	A	10.0	12.0	10.2	5.2	590	○	62	O-S-A	B	14.6	9.5	4.2	880	77	0	0	0	0				
30	J-8	A	10.0	9.0	9.0	5.1	580	○	63	M-X-L	B	9.2	7.4	4.9	200	78	0	0	0	0				
31	J-8	A	10.0	8.0	6.0	3.0	220	○	64	O-S-A	B	7.0	4.2	4.5	290	79	0	0	0	0				
32	J-8	A	10.0	7.0	5.0	2.2	290	○	65	P-S	B	9.1	4.9	4.7	290	80	0	0	0	0				
33	J-K-8	A	15.0	11.0	8.2	7.0	700	○	66	P-S	A	9.5	2.2	4.0	380	81	0	0	0	0				

第4表 下層出土確認観察表

第24図 崩レ塚占墳群配置図 (S = 1 : 300)



## 2. 崩レ塚1号墳

### (1) 立地と調査前の状況

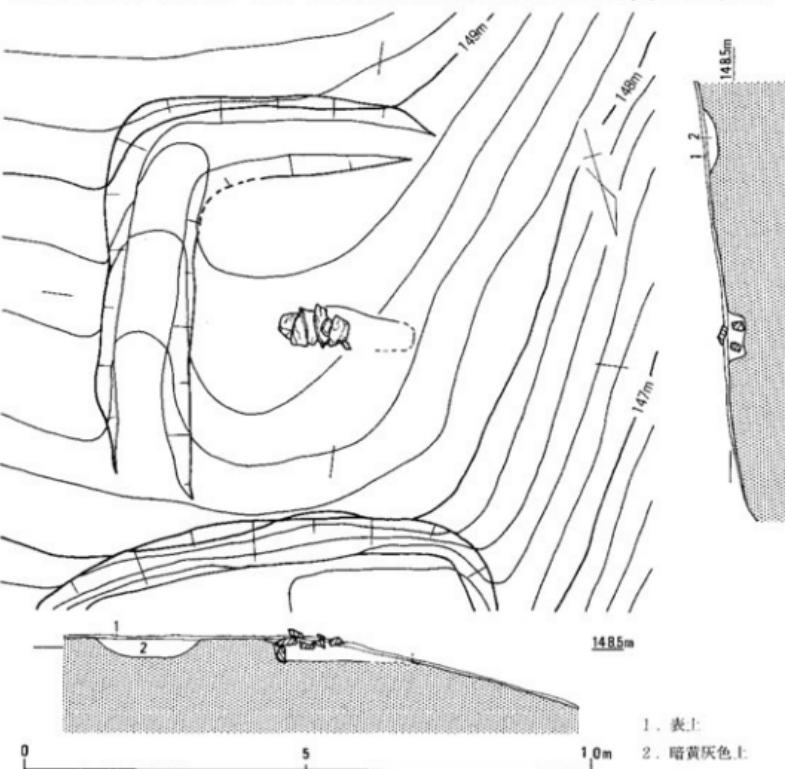
崩レ塚1～4号墳は、岡山県津山市金井字崩レ塚1012-1番地・他に所在する。

クズレ塚古墳と同一丘陵上の高所、標高148～149mの稜線上から西側の谷に向かう緩斜面に立地する。また、2号墳とは近接しているがその前後関係は明確でない。

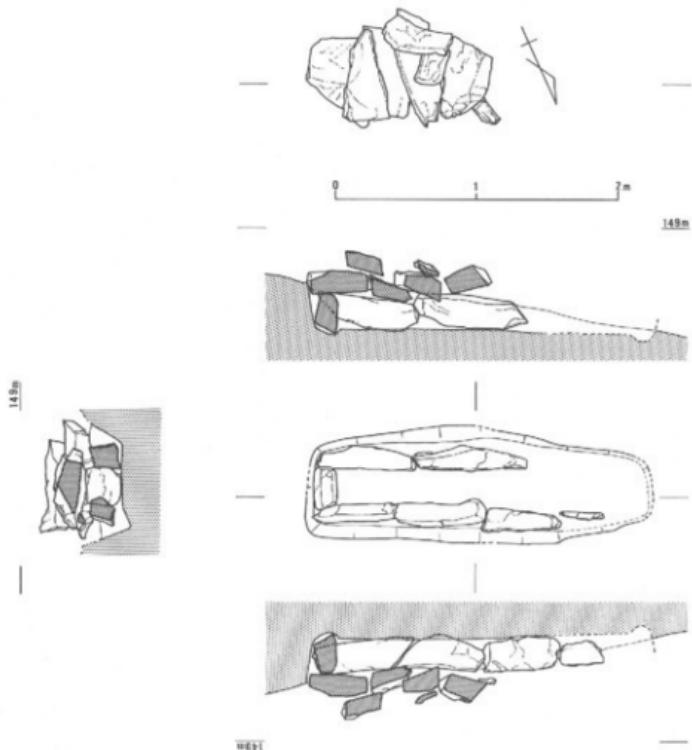
調査前の状況は、主体部と考えられる箱式石棺の蓋石の一部と、すでに蓋石を失った部分の側石の一部が露出していた。しかし、古墳の墳丘と思われる高まりなどは確認できなかった。

### (2) 墳丘と周溝

山側にL字形に周溝がめぐる方墳である。南北6m、東西6mを測りほぼ正方形を呈する。葺石は存在しない。周溝は、幅1.4～1.7m、深さ0.3mで断面は緩やかなU字形を呈し、埋土



第25図 崩レ塚1号墳平・断面図 ( $S = 1:100$ )



第26図 1号墳主体部平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )

は暗黄灰色を呈する单層である。盛土はまったくみられず、周溝底からは高さは、0.4m程度である。なお、周溝内からの出土遺物は皆無である。

### (3) 埋藏施設

中央部に尾根線に直交する形で、箱式石棺1基が存在する。西側半分はすでに流失している。掘り方は上端で現長2.45m、幅0.7mを測る。蓋石は5個残存し、平らな厚めの自然石を使用している。蓋石の隙間には小さな石や粘土で充填している。小口部は、東側のみ残存し高さ28cm、幅27cm程、側石は高さ20cm、長さ60~70cm前後の上面が平らな自然石を使用しており、北側で3枚、南側で2枚残る。なお、西側小口部では石をそえた時の掘り込みは確認できなかった。石棺は一部流失しているものの、内法で現長1.9m、幅0.26m、高さ0.27mを測る。

### (4) 出土遺物

出土遺物は、皆無である。

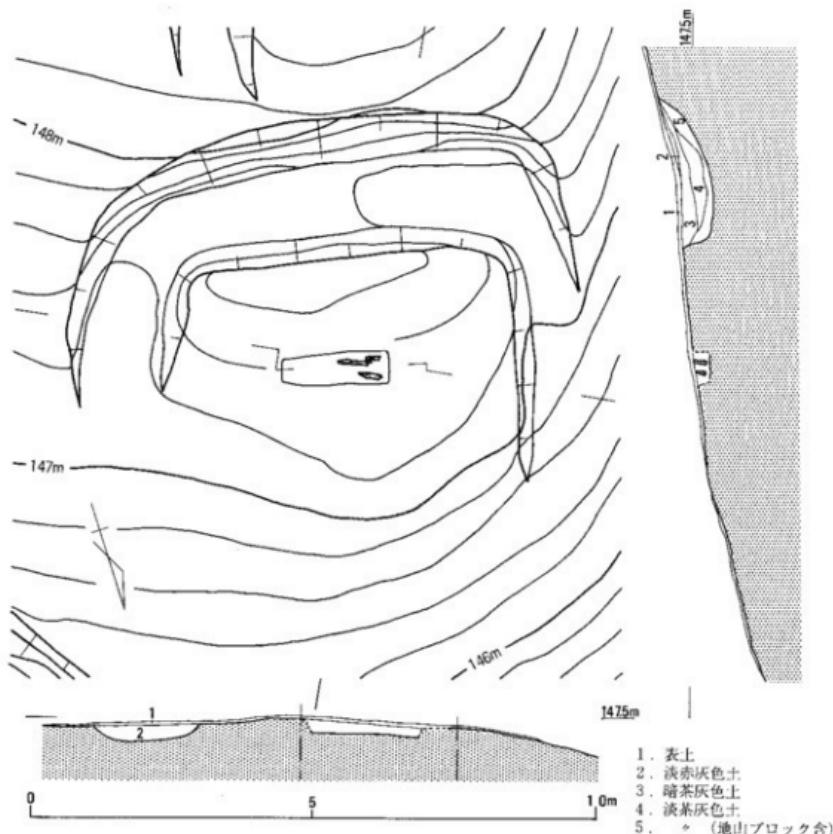
### 3. 崩レ塚 2号墳

#### (1) 立地と調査前の状況

1号墳に接し、谷に向かった緩斜面に立地する。標高は、147～148mである。調査前の状況は、主体部の箱式石棺の側石の一部のみが露出していた。また、古墳の墳丘らしき高まりなどは確認できなかった。

#### (2) 墳丘と周溝

山側にコの字形に周溝がめぐり、南北5m、東西6.5mを測る方墳である。周溝は最大幅2.5m、深さ0.6mで断面は緩やかなU字形である。また、埋土は4層で南西隅からやや浮いた状

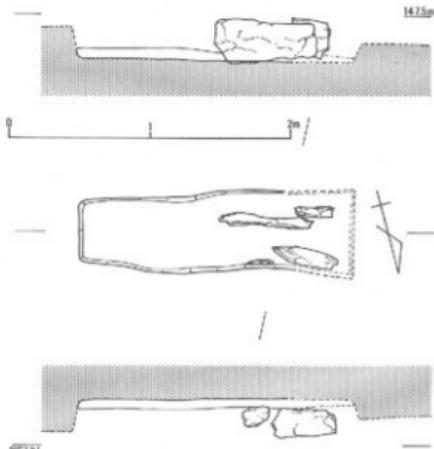


第27図 崩レ塚 2号墳平・断面図 ( $S = 1:100$ )

態で、土師器細片が出土している。周溝底からの高さは0.6mを測る。盛土は確認されず、葺石も存在しない。

#### (3) 墓葬施設

中央部に尾根線に直交する形で、箱式石棺1基が存在する。非常に残りが悪く側石の一部しか残存しない。埋土と地山との識別が難しく、トレンチにより掘り方ラインを確認した。掘り方は西側



第28図 2号墳主体部平・断面図 (S = 1 : 40)

が一部不明瞭だが、ほぼ方形で現長1.95m、幅0.5mを測る。残存する石は、北側石が長さ45cm、高さ20cm程、南側石が長さ75cm、高さ30cm程でいずれも扁平である。またいずれも隙間を充填した小さめの石を伴う。両側石間は17cm程である。

#### (4) 出土遺物

箱式石棺内は皆無であった。また、周溝内の土師器片も細片で、摩滅が著しいため実測不可能である。壺の破片と考えられる。

### 4. 崩レ塚3号墳

#### (1) 立地と調査前の状況

2号墳から3.5m程離れた丘陵稜線上の緩斜面に位置し、なおかつ4基の中では一番展望の良い場所に立地している。標高は145.5~146.5mである。

調査前の状況は、箱式石棺の蓋石が3枚確認され、それらが粘土で覆われていたこともわかり、少なくとも蓋石はさらに数枚あることが考えられた。本墳には、若干の盛土（粘土の覆いも含め）の存在が予期された。4基の中では、残存状況も良好である。

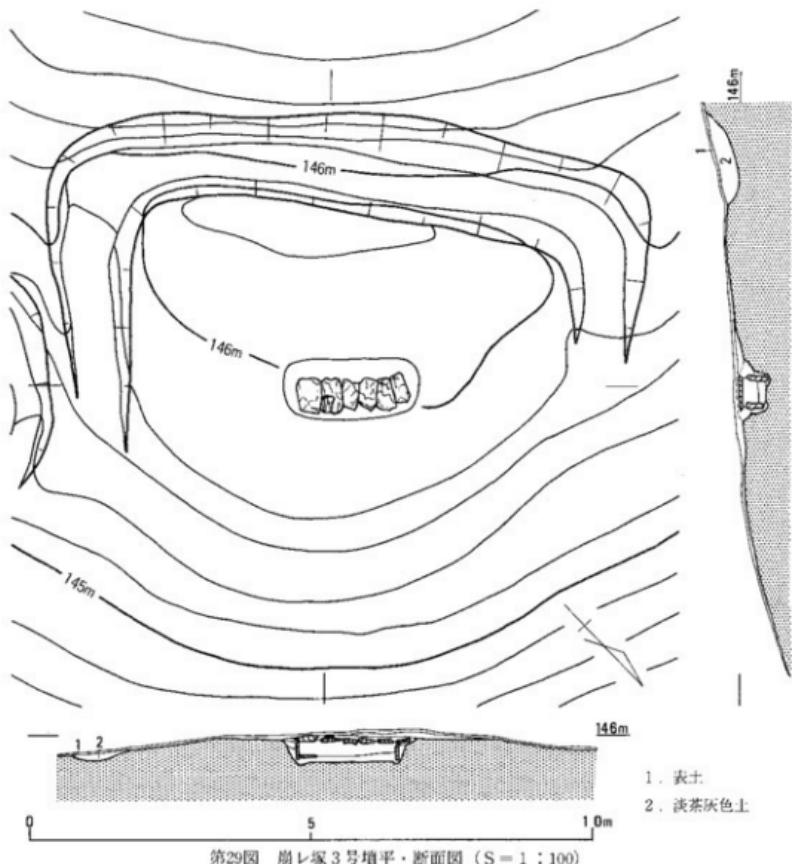
#### (2) 墓丘と周溝

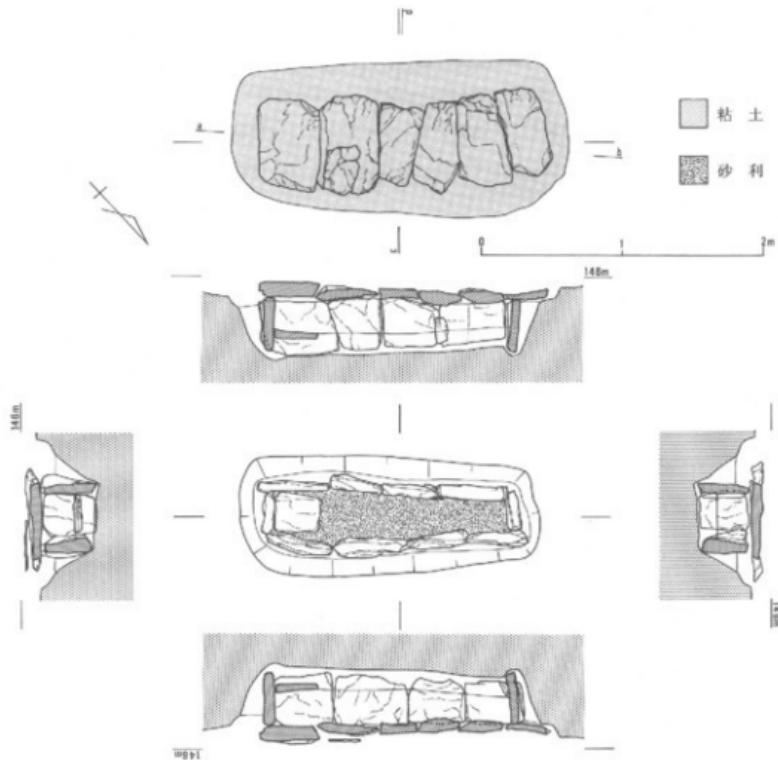
山側部分に、コの字形に周溝をめぐらす方墳である。南北7.5m、東西8mを測る。墳丘には若干の盛土が確認され、蓋石を粘土（第31図2）で覆った上に厚さ15cm程の地山ブロックを含む粘質な乳茶褐色土（第31図1）を盛っている。盛土も北東側斜面部では、確認できなかつた。すでに流失しているのかもしれない。

周溝は幅1.5~2m、深さ0.3mを測り、断面は緩やかなU字形を呈する。埋土は、単層で出土遺物は無い。周溝からの高さは0.4mである。蓋石も存在しない。

### (3) 埋葬施設

中央部に尾根線に直行する形で、箱式石棺1基が存在する。箱式石棺は、上面を長さ2.4m、幅1.1mのほぼ橢円形状に粘土で目張りを行なう。厚さは7cm程である。蓋石は、6枚からなり長さ50~70cm、幅30~40cm、厚さ10cm前後の扁平な石であり、1号墳のとは形状が異なる。すべて隙間なく、一部で相重なるように並べられている。東側から2番目の石の上には、小さな石でさらに充填を行う。掘り方は、蓋石の部分で1段あり、そこから2段目を掘りこんでいる。1段目の埋土は粘土である。2段目の掘り方は、長さ2.15m、幅は東小口側で0.8m、

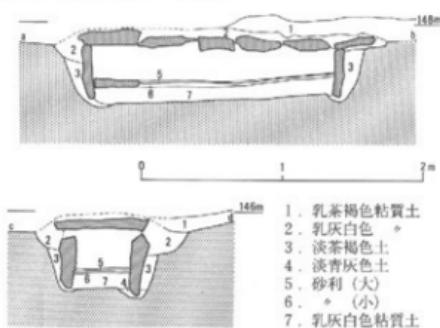




第30図 3号墳主体部平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )

西小口側で0.6mのいびつな隅丸方形である。両小口の石は、幅30cm、高さ35cm程の上面平らな扁平な石である。側石は、いずれも4枚からなり高さ30~40cm、長さ30~50cm程の石で、接合部の隙間に充填の小さな石がみられる。南小口側には長さ30cm、幅25~30cm程の台形状をした扁平な枕石がみられ、厚さは4~6cm程で小口に向かって若干高くなる。内部には玉砂利が敷かれ、

4cm程の大粒な上層(第31図5)と、2cm程の小粒の下層(第31図6)の2層からなる。さらに



第31図 3号墳主体部土層図 ( $S = 1 : 40$ )

最下層は粘土質の土(第31図7)である。この事から石棺の埋葬順序を復元すると①墓壙を2段(?)に掘る。この時、小口・側石部を少し深めに掘る。②小口・側石を並べ裏込めに土をいれ固定する。③内部にも粘土質の土を厚さ10cm程敷き、枕石をのせさらに玉砂利を枕石の厚さの分だけ大小2層に分けて敷く。④遺体を葬り蓋石をする。⑤蓋石の上を粘土で覆う。⑥さらにその上に若干盛土をおこなう以上である。内法は長さ1.7m、幅0.35m、高さ0.28mである。

#### (4) 出土遺物

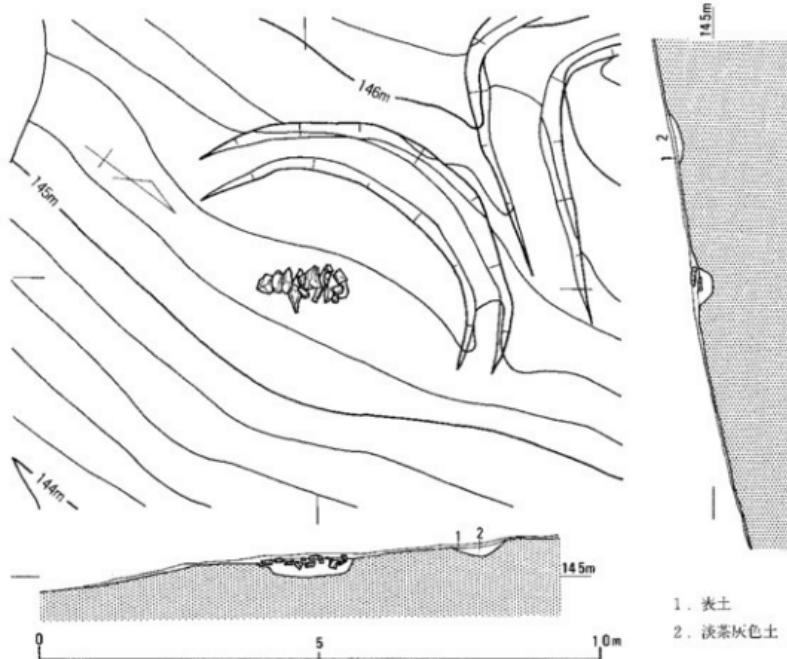
未盗掘ではあったが、遺物は皆無であった。

### 5. 崩レ塚4号墳

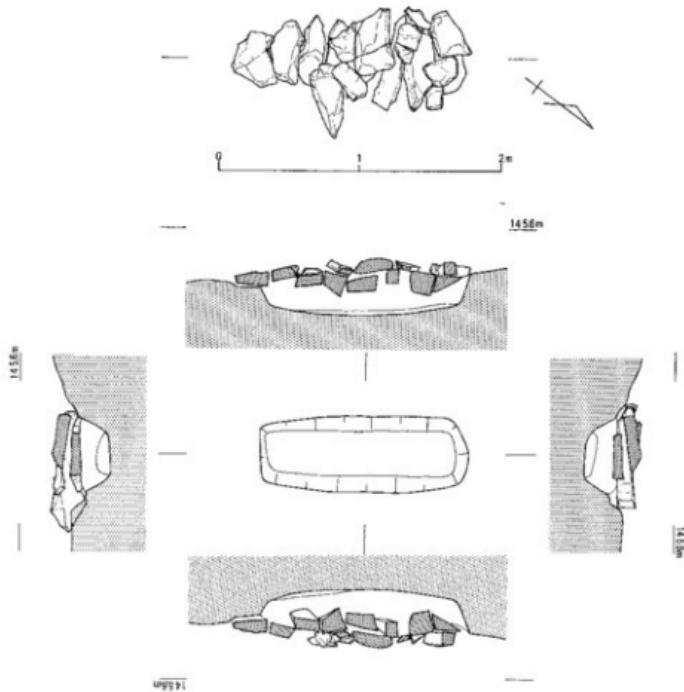
#### (1) 立地と調査前の状況

3号墳に接し、丘陵稜線より東の谷に向かう緩斜面に位置する。標高は、145.5m~146mである。

調査前の状況は、主体部の蓋石が露出し他同様に古墳らしき高まりなどは確認できなかった。また、未盗掘と思われた。



第32図 崩レ塚4号墳平・断面図 (S = 1 : 100)



第33図 4号墳主体部平・断面図 ( $S = 1 : 40$ )

#### (2) 墓丘と周溝

山側に半円形に周溝があがぐる、円墳である。直径約5mを測る。また、盛土は確認できず周溝は、幅0.8~1.2m、深さ0.2mで、周溝底からの高さは約16cm程度である。埋土は単層で出土遺物は無い。また、葺石も存在しない。

#### (3) 埋葬施設

中央部に尾根線に直交する形で石蓋土壙墓1基が存在する。4基中本墳だけが円墳で、主体部が石蓋土壙墓である。蓋石は、厚さ10~15cm程の自然石を9個一列に並べ、その上に隙間を充填する形で小さな石を北西側に集中させて重ねている。この部分に重点がおかれており事から、この部分が頭位であろうか。土壙の掘り方は、埋土と地山とが識別しにくく、トレンチで最終確認をおこなった。上面で長さ1.48m、幅0.55m、深さ0.23mを測る。

#### (4) 出土遺物

出土遺物は皆無である。

## V まとめ

### 1. クズレ塚古墳について

クズレ塚古墳は、丘陵の先端部に単独で立地する直径9~12m程の円墳で、横穴式石室を内部主体にもつ。横穴式石室は全長9mを測り、美作地方でも有数の規模である。また、陶棺をもつ事から一部在地的な特徴を示す。調査は2次にわたり出土遺物として、陶棺・須恵器・土師器・鉄器・耳環・鐵滓がある（註1）。まずその中の須恵器から築造時期を考察してみたい。須恵器は、前回調査分も合わせ計51個体が出土している。この内軸年基準となる杯は37個体を数え、前述のように口径や成形技法から、おおまかに蓋・身とも3つに分類できる（第34図参照）。以下それらの概略を述べる。

杯蓋A類（第14図3、第36図1~3） 口径13.5~14.1cm、器高3.3~4.3cmで、天井部はやや丸みをおび、回転ヘラ削りを施したものとヘラ切りのままのものがある。

杯蓋B類（第36図4~7） 口径12.8~13.2cm、器高3.8~4.0cmで、天井部はヘラ切りにより平となるものが多い。今回の調査では出土していない。

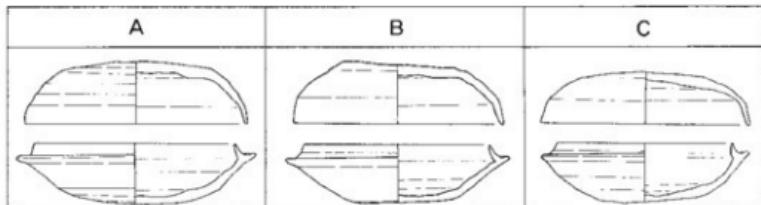
杯蓋C類（第14図4、5） 口径12.2~12.8cm、器高3.1~3.2cmで、器高が低く扁平となる。天井部は、ヘラ切りのままでやや丸みをもつ。

杯身A類（第14図8~12、第36図10~12） 口径11.8~12.6cm、器高3.5~4.0cmで、底部に回転ヘラ削りを施したものとヘラ切りだけのものがある。杯蓋A類とセットとなる。

杯身B類（第14図13~15、第36図13、14） 口径11.2~11.5cm、器高3.4~3.7cmで、底部はヘラ切りにより平となるものが多い。杯蓋B類とセットとなる。

杯身C類（第14図16~18） 口径10.5~11.0cm、器高3.5~3.9cmで、底部はヘラ切りのままである。杯蓋C類とセットとなる。

以上のほかに、蓋・身（第14図1、2、6、7、第36図8、9）はさらに分類可能であるが、これらは遊離遺物や、また個体数も少なくセット関係など不明な部分も多い。これらについては、あらためて言及するとして、主流であるA、B、Cの3類について考えてみたい。



第34図 須恵器分類図

前回調査の陶棺部分ではA類6個体、B類10個体が出土している。この部分は、現状がほぼ保たれていると考え、B類が比較的多い事からこれを陶棺部分の最終埋葬に伴う遺物と考える。なお、A類も見られることからB類以前の埋葬も考えられる。この事は、A類が今回の調査では石室入口に堆積している埋土内より散在的に出土し、この状況があたかも追葬時に掻き出された様相とも考えられ、さらに成形技法に回転ヘラ削りを使用しているなど古相の特徴を示すことからも窺える。しかし、これらが陶棺における追葬であるのか、陶棺以前に別の埋葬があつたのかは現時点では疑問が残るもの、ここでは陶棺における追葬と解しておきたい。

次にC類であるが、陶棺部分では出土せず石室中央部の北側壁側に集中する。ここでは耳環2個と須恵器とが中央に空間を残し、取り巻いた状態で出土している。この事からこの部分に埋葬主体を考えている。鉄釘は発見されなかったが、おそらく木棺であろう。

以上から埋葬は少なくとも3次にわたり、A類（奥壁部分・陶棺？）→B類（奥壁部分・陶棺）→C類（石室中央北側部分・木棺）の順に埋葬されたのである。しかし、盗掘のため陶棺内に埋葬された明確な人数は不明であり、これら以外にも埋葬があった事は、十分考えられる。

次にこれらに須恵器編年をあてはめてみることにする。当地方ではまだ須恵器編年は十分な資料がそろわざ完成の域には達していないものの、横穴式石室を有する群集墳をある程度支群ごとに調査した、久米町の猿山遺跡群の編年（註2）によると、A類が1期の新阶段に、B・C類が2期の新阶段にはあたる。また、これらは一般的な須恵器編年では、A類が出迎昭三氏（註3）のTK10～TK43の中間型式からTK43型式に、B・C類がTK43型式の範疇で捉られる。さらに横穴式石室の構造、陶棺の型式などから総合的に勘案して、本古墳は概ね6世紀の後半頃に築造され、7世紀前半頃まで隨時追葬されたと考えるのが妥当であろう。

さらに、出土遺物の中で特徴的なものにも若干触れてみたい。陶棺は焼き物の棺桶で西日本を中心に分布がみられ、特に美作地方は全出土の過半数を占め特筆的な産物と言えるものの、その分布には偏在性がみられる。また、同一古墳群内でも陶棺をもつものとそうでないものとが混在し（註4）、陶棺を有する古墳にも別の埋葬主体が併用されている。今回は1棺だけであったが1～3棺が通常で、またある程度時期も限定されるためその被葬者を当時の社会における政治的要因、例えば土器や鉄生産などの専業集団の掌握に関連させる考え方もあり予断を許さない。この鉄生産との関連については後述する。

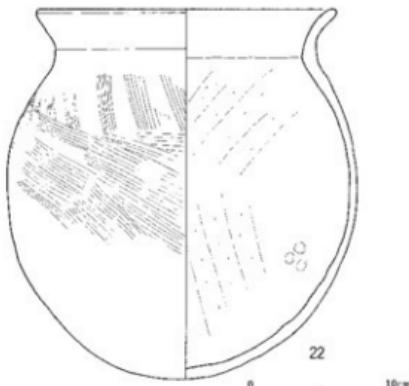
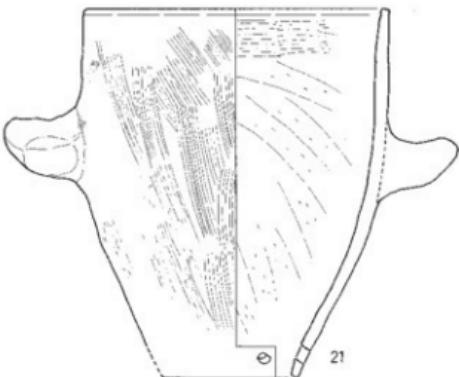
須恵器の成形時の特徴をあらわすものとして、杯身（第14図9）の内面に、タタキの當て具痕がみられる。これは底部のヘラ削りの際の當て具痕、外面タタキ調整の際の當て具痕などと言われているが不明な部分も多い。今回は1個体しか確認していないが、これに関する論考も多いので参照されたい（註5）。

また、土師器は須恵器に比べると非常に出土数が少ない。本古墳では、陶棺部分で瓶と壺が2個体ずつ、計4個体出土している。しかもこれらはいずれもほぼ現位置を保っており、さら

にそれらのセット関係も分かってい  
る。甌の出土した例は、津山市篠瀬  
3号墳（註6）などでみられるが、  
出土状況がはっきりとし、さらにセッ  
ト関係までわかる例は非常にめずら  
しいと言える（第35図参照）。

最後に、古墳出土の鉄滓と製鉄関  
連についても触れてみたい。鉄滓は  
製練や鍛冶の際で廃棄物であるの  
で製鉄が行なわれていた傍証になる。  
最近本市をはじめ総社市など岡山県  
内で製鉄遺跡が多数調査され、製鉄  
史の謎が徐々に解き明かされようと  
している（註7）。製鉄遺跡は、製  
鉄炉、炭を焼いたと考えられている  
炭窯、それらを行った作業場、鉄滓  
等の廃棄場などからなる。本古墳周  
辺でも関連遺構が発見されており、  
また、一貫西1号墳・大畑1号墳・  
小原土塙墓で鉄滓の出土を見る（註  
8）。この内、一貫西1号墳以外は  
時代や埋葬形態がやや異なるもの、

ある時期この辺りが製鉄に関連して 第35図 クズレ塚古墳陶棺部分出土遺物1 (S=1:4)  
いた地域であった事は十分考えられる。また、近接するほぼ同時期の柳谷古墳では鉄滓が出土  
せず銀象嵌をほどこした頭椎大刀の把頭など他地域との交流を示唆する遺物が出土している（註  
9）。この古墳は規模も小さく、また陶棺を使用していないなど在地的な要素が欠如し、なお  
かつ装飾的な遺物がみられることから、本墳などとは異なる集団あるいはその一員で、鉄生産  
には関与していないかったのではなかろうか。少なくとも本墳の被葬者は、陶棺に代表されるよ  
うに在地的であり、さらに周辺製鉄遺跡の存在や鉄滓供獻（？）などから類推して鉄生産にも  
関与もしくはそれを掌握していた地域的小首長であったと考えられよう。なお今回は論及して  
いないが、このように地域における陶棺有無の違いによる被葬者像、鉄滓出土古墳の製鉄との  
関連など今後さらに周辺地域や他地域と比較検討していくことも肝要となる。これらについて  
はあらためて言及して行きたいと考えている。



## 2. 崩レ塚古墳群について

崩レ塚古墳群は方墳3基、円墳1基からなる。いずれも小規模で埋葬施設は1基であり、前者が箱式石棺、後者が石蓋土壙墓である。またいずれも出土遺物が皆無に等しく時期を決めかねるのが現状である。本古墳群は、L字形に1・2・3・4号墳が相接する形で築造されている。出土遺物も少なく相互の切り合い関係も無いため築造順番は明確でないが、選地の様相からして3号墳が4基中で一番展望の良い所に造られ、なおかつ埋葬が丁寧であると言える。4号墳はこの3号墳の築造に大きく起因して造られているようであり、3→4号への順番が考えられる。また1・2号墳は高低差から1→2号が妥当と考える。なお、この両者の前後関係は不明だが、ここでは高低差を考慮して1→2→3→4号の順番に築造されたと解しておく。

また1~3号墳の箱式石棺はいずれも構造が異なっている。箱式石棺を有する例として津山市鷺里箱式石棺（註10）、八出覗山遺跡の箱式石棺（註11）等がある。両者とも古墳と考えられるが主体部以外は不明である。前者からは3体の人骨と勾玉・刀子片が出土しているが、後者からは出土遺物もなく同様に即時に時期決定はできない。前者は内部床面に、扁平な石を敷きつめており、後者も床面に砂利を敷く点で3号墳に似ているものの、その上にさらに粘土を敷いている点で両者とも若干構造が異なる。また方墳の例として、沼6号墳（註12）、下道山南古墳（註13）等がある。前者は、10数基の小規模な円・方墳から成る古墳群で、6号墳をはじめ箱式石棺を主体部にもつものが多い。しかし、6号墳は他に粘土壠の主体部をもち2棺並列の形をとる。また後者も箱式石棺の2棺並列である。この両者の古墳は出土した埴輪などから、ほぼ5~6世紀代の年代が与えられている。これらと本古墳群は規模・副葬品などの面で格差があり、即これらの時期にあてはめるわけにはいかない。また一般にはこれら小規模墳は5世紀代のものとされている。時期決定は、このような小規模墳の類例の増加を待ってあらためて比較検討するとして、今回は即断せずに小規模古墳群の類例の紹介にとどめておきたい。

## 3. 縄文時代の遺構・遺物について

クズレ塚古墳下層出土の縄文時代の遺構・遺物に関しては、若干触れてみたい。出土した縄文土器は、無文土器・突帯を持つ土器の2個体である。前者は、底部以外はほぼ復元できるものの、後者は小片で器形すら復元できない。また、焼けた礫を含む礫群がある。

津山を含む岡山県北部の山間部における縄文時代の遺跡は、蒜山地方など北西部にやや集中して分布するものの散在的である。また、これら土器などは採集された断片資料が多く、はっきりとした遺構を伴う例は少ない。鏡野町竹田遺跡（註14）、哲西町佐藤遺跡（註15）などで住居跡が発見されているぐらいである。また、狩猟用の「落とし穴」と考えられる梢円形をした土壙も最近発見されてきている（註16）。今回のように礫群を伴う例は見られない。時期的にみても早期が多く、前・中期が少なく後・晩期にやや増加する傾向が見られる（註17）。

今回出土の礫群は明らかに火を使用した施設であるが、周辺に住居跡等生活の痕跡が見られ

ない事から、この遺構は季節によって移動するキャンプ地的な性格の遺構と考えられる。なお先の鏡野町竹田遺跡のように早期の住居跡を伴う例は、開けた丘陵上に早くから定住していた母村的な性格のものであろう。

出土した繩文土器2個体の内、無文土器は層位的さらに分布状況から明らかに疊群に伴うものである。この無文土器の時期であるが文様を有しないため即断はできないが、器形のプロポーションなどからして押型土器を伴う早期の可能性も考えられる。また突帯を持つ土器は、器壁の薄さ、胎土に砂粒を多く含む特徴から羽島下層式並行期に類似例がみられ、さらにこの時期は九州の轟式との類似性も指摘されている（註18）が、今回出土の土器は器壁の厚さ、内面調整などの面でそれとは若干様相を異にするように思われる。この時期、他地域との交流・影響が本地域でもかなりあった事も推測されよう。即断は許されないがここでは前期の所産と考えておきたい（註19）。なお無文土器に関しては、突帯を持つ土器と同時期の可能性も考えられ、新たな資料の増加を待ちたい。

（註1）前回（1952年）調査の遺物（須恵器、土師器の内一部所在不明）に関しては、再整理・実測を行った。なお、これら遺物は地元河辺公民館に保管されていたが、現在は今回出土遺物と共に津山郷土博物館で保管している。

（註2）村上幸雄「稼山遺跡群」Ⅱ『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（2）1980年

（註3）田辺昭三「陶邑古窯跡群」I 1966年

（註4）先の久米町線山遺跡群内で、各支群ごとに陶棺持つ古墳とそうでない古墳とが存在する。陶棺については（註2）が詳しい。

（註5）中村 浩「須恵器の製作手法」『陶邑』I 1976年

田辺昭三「須恵器の製作技法」「須恵器大成」1981年

橋野浩三「須恵器蓋杯の製作技術」「文化財学報」第2集 1983年

江浦 洋「同心円文スタンプを有する須恵器蓋杯の製作技術」「鶴谷池遺跡」1986年

なお、前回出土の須恵器蓋杯・身1セットの外側に平行タタキ痕が残るものがある。

（註6）行田裕美「粟瀬古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第13集 1983年

（註7）総社市の水島機械金属工業協同組合第二団地内の発掘調査で、製鉄作業場や製鉄炉60基、炭窯16基などが発掘されている。

（註8）本工業団地内でも、製鉄炉1基、炭窯7基、鉄滓廃棄場3箇所、鉄滓出土古墳4基などが調査されている。県内の鉄滓出土古墳に関しては（註6）が詳しい。なお、小原土壤墓の鉄滓と共に出土した須恵器・壺の内面には、車輪文のタタキ當て具痕がみられ須恵器生産と鉄生産との関連が注目される。関連する本工業団地の報告書は、一部既刊されている。その他は近年随時刊行される予定である。

行田裕美・保田義治・木村祐子「深田河内遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第26集 1988年

保田義治・行田裕美「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第28集 1989年

（註9）保田義治・行田裕美「柳谷古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第24集 1988年

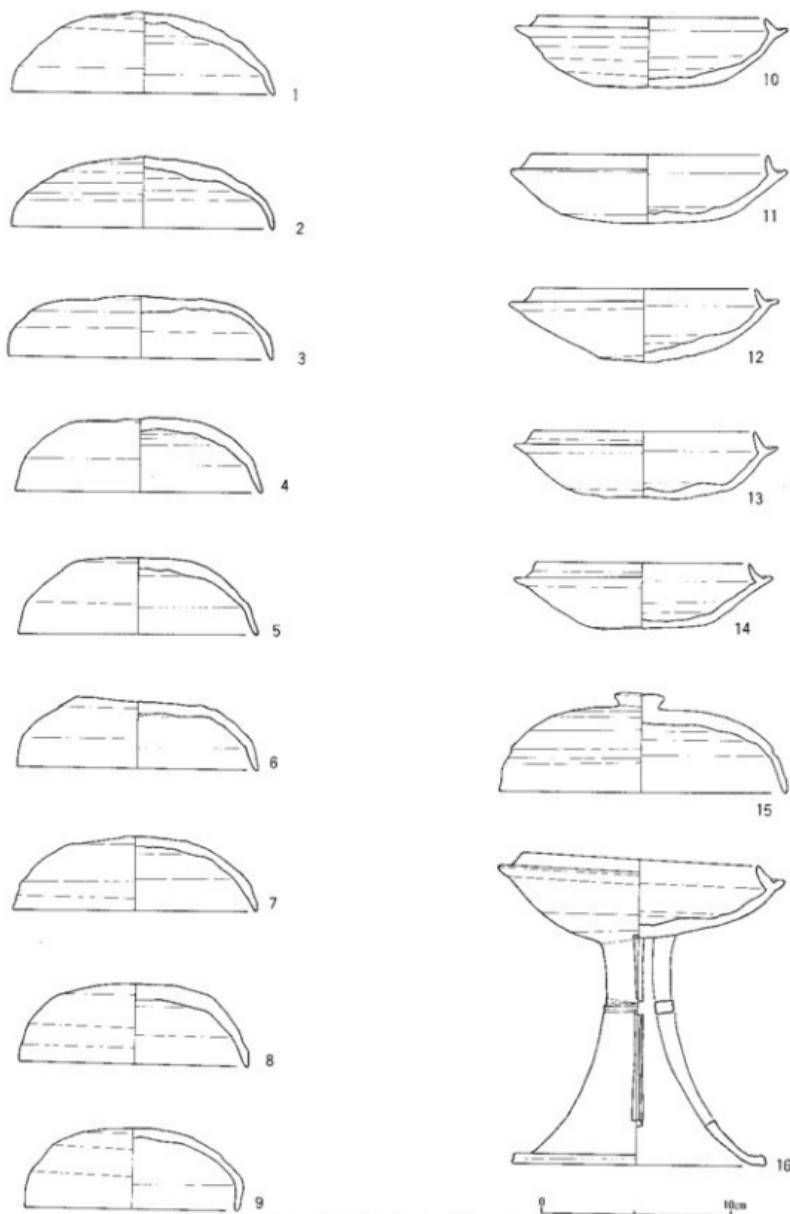
- (註10) 渡辺健治「美作邑里式石棺調査報告」『古代吉備』第2集 1958年
- (註11) 漢 哲夫「八出現山遺跡発掘調査報告」『津市山埋蔵文化財発掘調査報告』第3集 1977年
- (註12) 今井 勇・渡辺健治・神原英朗・河本 清「美作津市沼六号墳調査報告」『古代吉備』第6集 1969年
- (註13) 阿木寛久・栗野克己「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(17) 1977年
- (註14) 十居 徹「竹田遺跡」『岡山県史』第18巻 考古資料 1986年
- (註15) 竹田 勝「佐藤遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(23) 1978年
- (註16) 本工業団地内でも大畠遺跡で5基、小原遺跡で3基などが発見されているが、出土遺物が少なく縄文時代と特定する根拠は乏しい。
- (註17) 平井 勝「第3章 縄文時代」『岡山県の考古学』1987年
- (註18) 錆木義昌・高橋 譲「瀬戸内」『日本の考古学』II 縄文時代 1965年
- (註19) 発見当初は、草創期の隆起線文土器として発表したが、その後の検討の結果、このような結論に達した。当方の早まった誤認をお許し願いたい。

### 土 葉

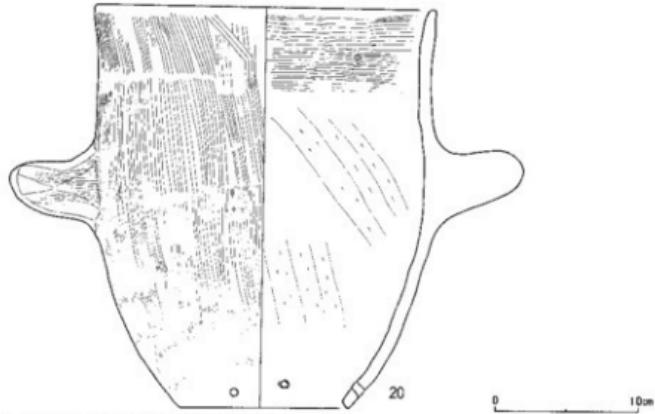
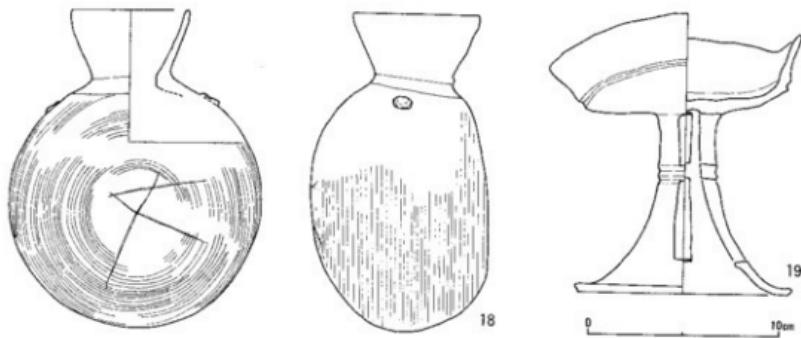
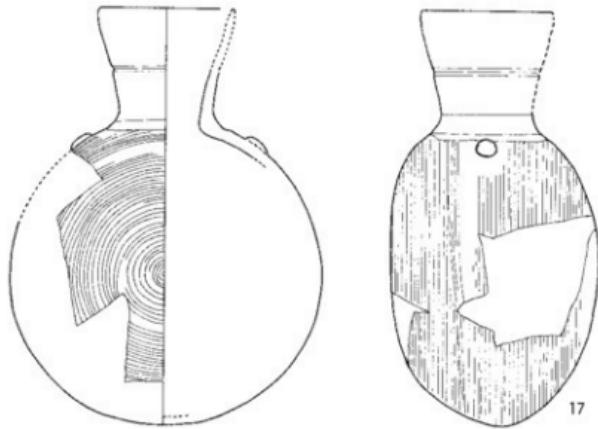
(番号は第5-33回に対応)

番号	基 標	口 深	幅 高	ヘラ削り	筋 さ	地 表	色 調	残 存 度	出 土 場 所	備 考
1	片 番	14.0	4.3	左	1mm以下砂粒	丸	好	褐色灰化	約2/3	周縁部分 外周部へハラ削り、内部スコナ 10とセット
2	*	(14.0)	3.8		2mm以下砂粒	*	*	*	*	ヘラ削り、ヨコナ
3	*	14.1	3.3		1mm以下砂粒	*	乳青灰化	約1/4	*	ヘラ削り(タキナ版)、ヨコナ 11とセット
4	*	13.2	3.9		2mm以下砂粒	*	乳灰白色	深	*	ヘラ削り、ヨコナ
5	*	13.0	4.0		3mm以下砂粒	*	乳灰灰化	*	*	*
6	*	12.8	3.8		1mm以下砂粒	*	乳灰白色	*	*	*
7	*	13.0	3.9		3mm以下砂粒	*	乳青灰化	*	*	*
8	*	12.2	4.2		0.5mm以下砂粒	*	*	ほぼ完形	*	*
9	*	11.5	4.3		5mm以下砂粒	*	暗青灰化	*	*	ヘラ削り、ヨコナ、歪んでる
10	片 番	12.2	3.7	左	1mm以下砂粒	*	乳灰白色	深	*	直輪ヘラ削り、ヨコナ
11	*	12.6	3.6		*	*	乳青灰化	ほぼ完形	*	ヘラ削り(タキナ版)、ヨコナ
12	*	11.8	3.9		*	*	乳青灰化	浅	*	ヘラ削り、ヨコナ、歪んでる
13	*	11.8	3.2		2mm以下砂粒	*	*	*	*	ヘラ削り、ヨコナ
14	*	11.2	3.4		*	*	乳灰白色	*	*	*
15	右曲瓦形壺	15.2	5.3	左	1mm以下砂粒	*	乳青灰化	*	*	直輪ヘラ削り、ヨコナ
16	右曲瓦形	12.5	16.4	右	*	*	*	*	*	直輪 直輪ヘラ削り、ヨコナ。透かしL2段3方開
17	筒 瓶	7.0	22.0		*	*	*	約2/3	*	カキ瓶
18	*	8.8	16.8		*	*	*	ほぼ完形	*	カキ瓶(淀羽あり)、ヨコナ
19	高 杯	13.0	13.0		0.5mm以下砂粒	*	乳灰白色	浅	*	ヨコナ。歪んでる。透かしL2段2方開
20	瓶	23.4	28.6		1mm砂粒	*	乳灰灰化	ほぼ完形	*	ハケ、ヘラ削り、円孔4個
21	*	21.0	26.4		2mm以下砂粒	*	*	*	*	ハケ、ヘラ削り、円孔2個
22	甕	20.6	26.2		*	*	*	*	*	ハケ、ヘラ削り

第5表 陶棺部分出土遺物観察表



第36図 クズレ塚古墳陶棺部分出土遺物2 ( $S = 1 : 3$ )



第37図 クズレ塚古墳陶棺部分出土遺物3 (須恵器 S = 1 : 3、土師器 S = 1 : 4)



# 図 版





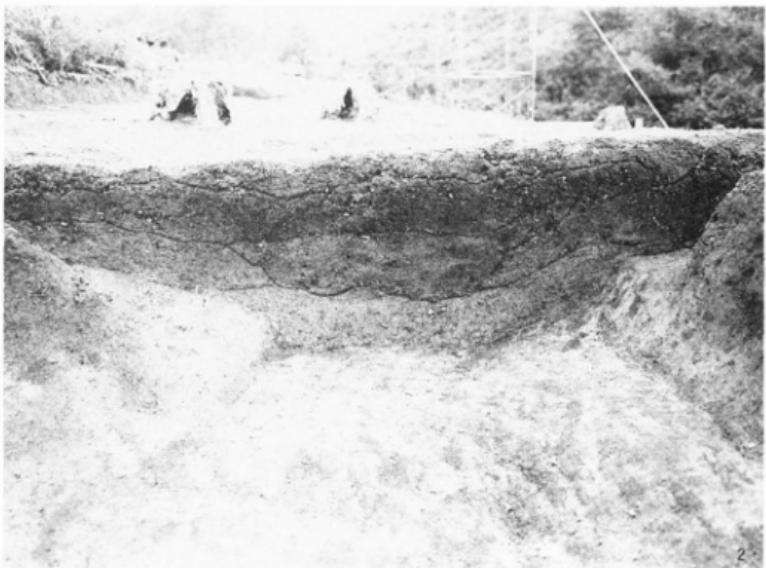
クズレ塚古墳遠景（北西から）



クズレ塚古墳全景（西から）



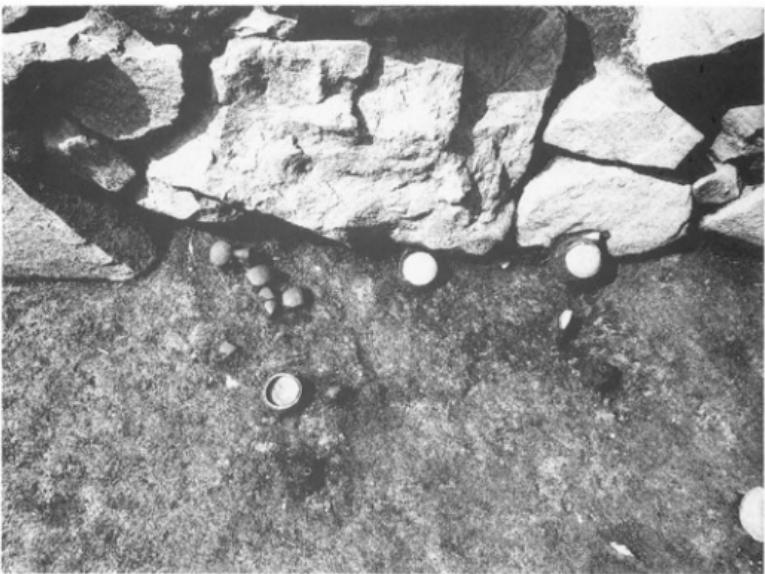
石室奥壁部分



周溝上層断面（南側、東より）



石室内遺物出土状況（全体）



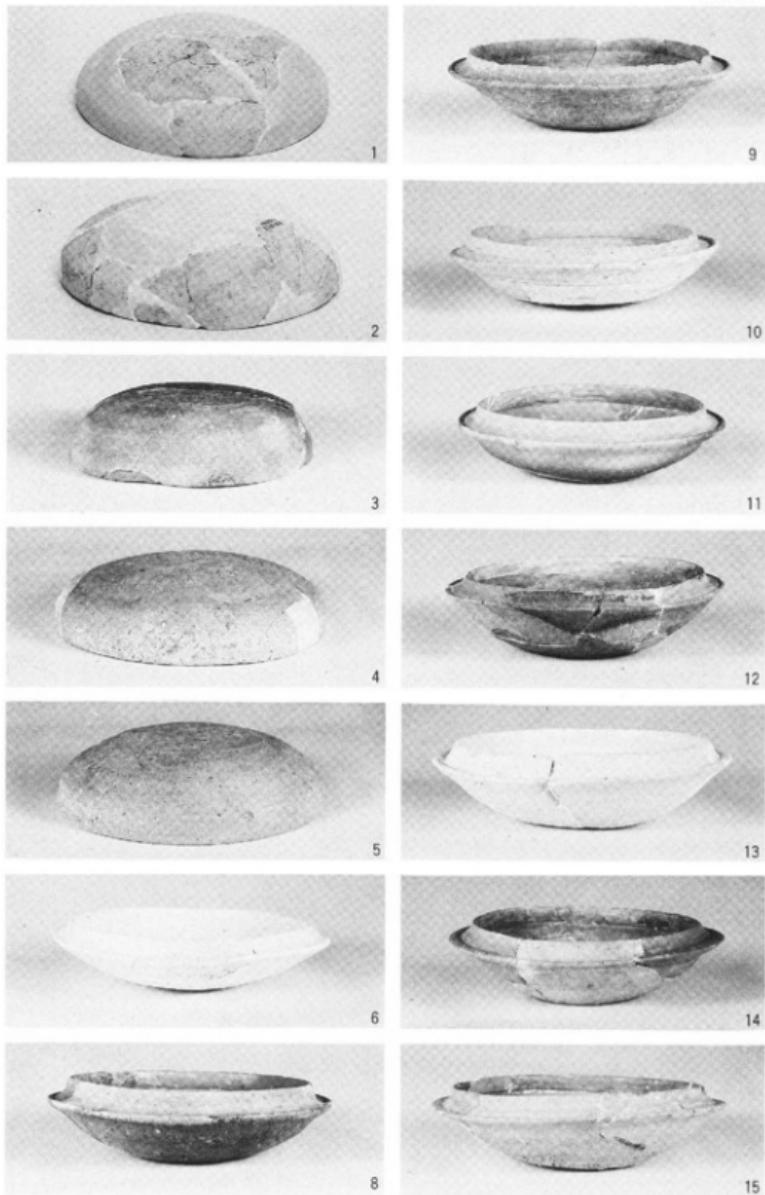
石室内遺物出土状況（部分）



下層遺物出土状況



下層遺物出土状況

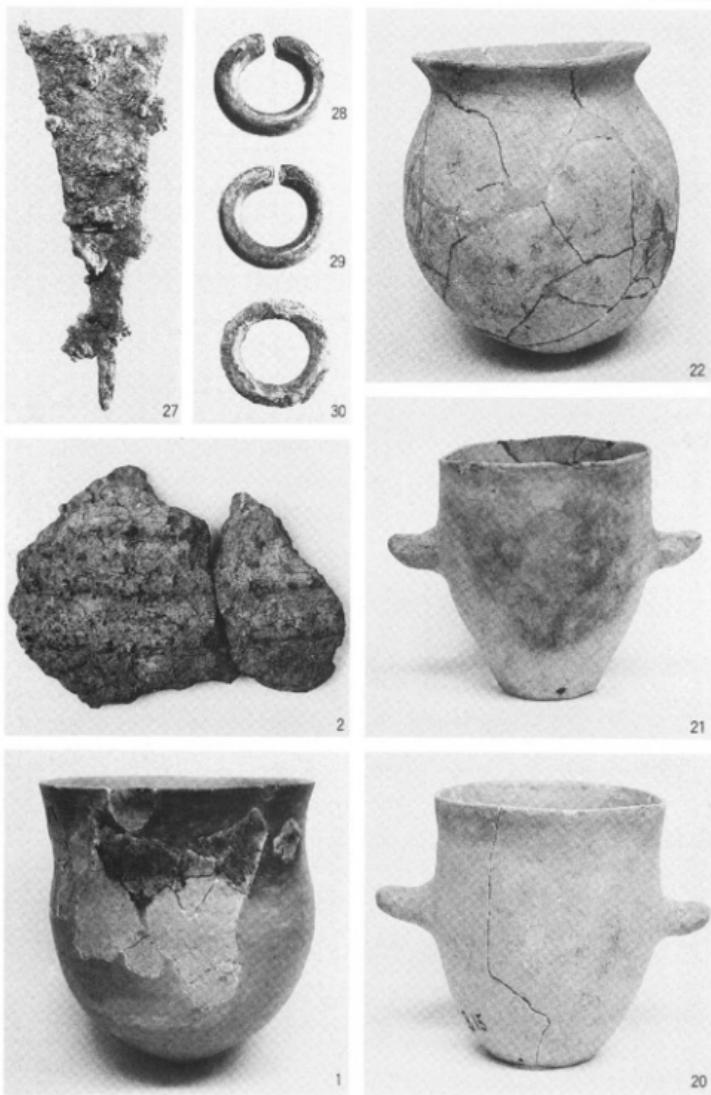


出土遺物 I (須恵器)

図版 6



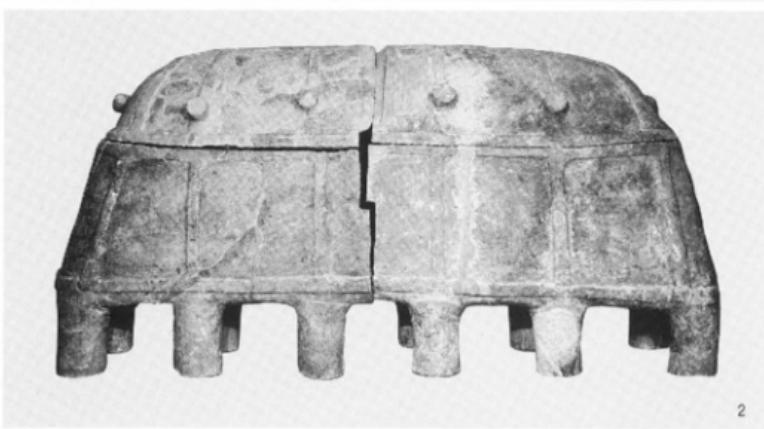
出土遺物 2 (須恵器)



出土遺物3 (縄文土器1・2、土師器20~22、鉄鎌27、耳環28~30)



1



2

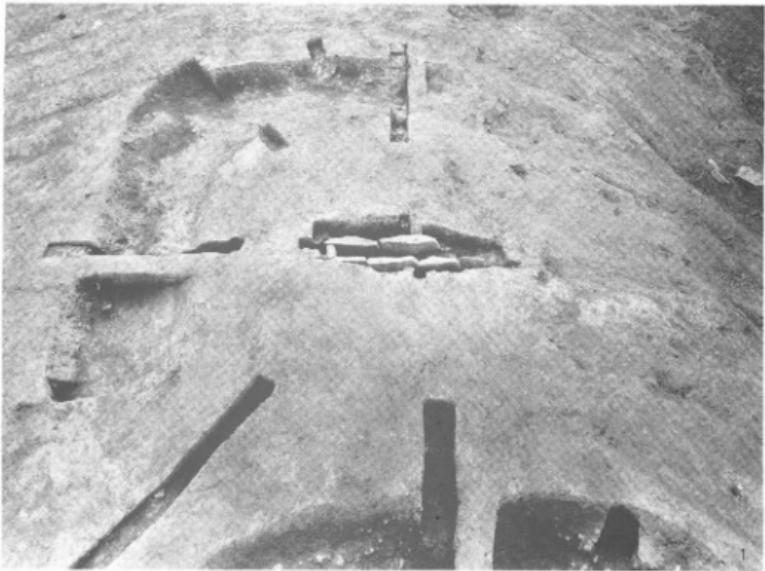
出土遺物 4 (陶棺部分出土須恵器 1、陶棺 2、  
鉄滓 3)



表



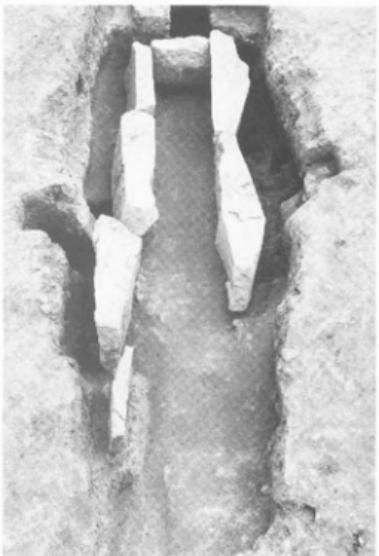
裏



崩レ塚1号墳全景（北から）



1号墳主体部（調査前、北西から）



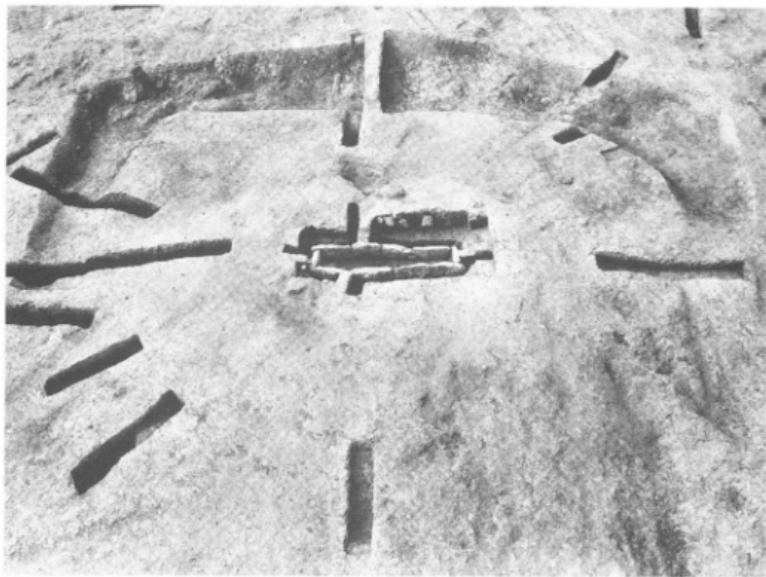
1号墳主体部（調査後、北西から）



崩レ塚2号墳全景（北から）



2号墳主體部（北から）



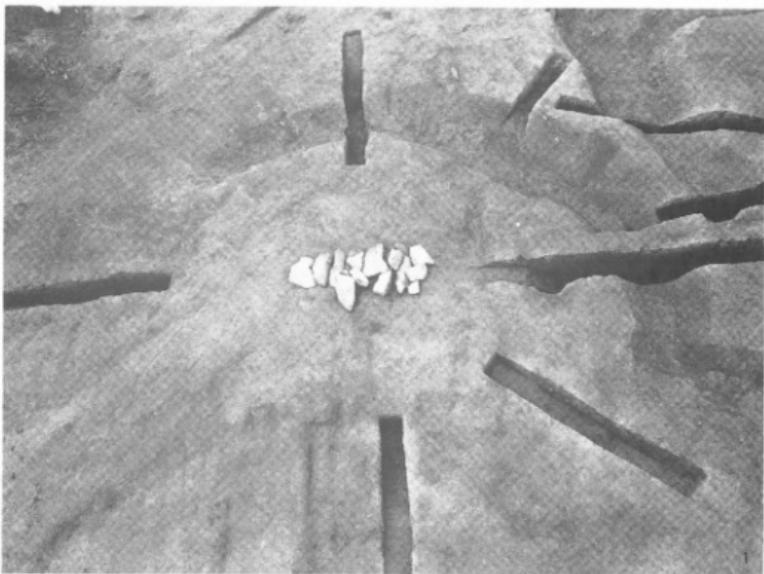
崩レ塚3号墳全景（北東から）



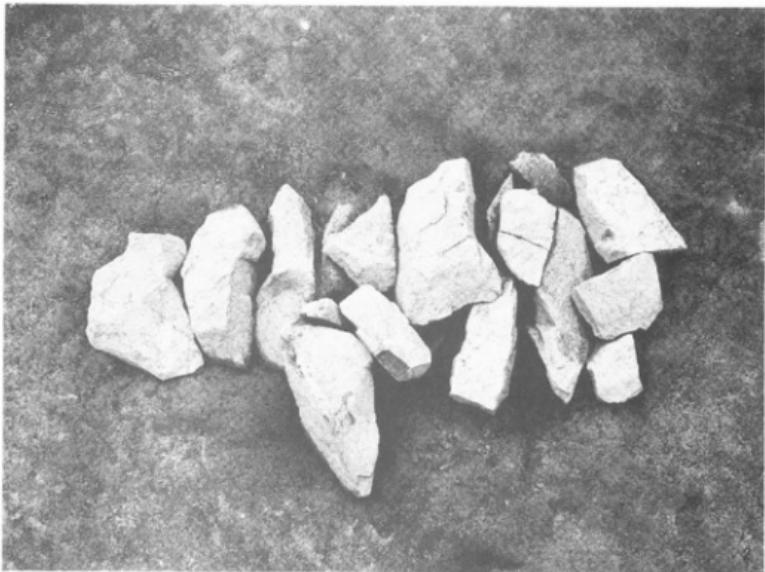
3号墳主体部（調査前、南東から）



3号墳主体部（調査後、北西から）



崩レ塚4号墳全景（北東から）



4号墳主体部（北東から）

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集

肩レ塚古墳群  
クズレ塚古墳

—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告4—

平成2年3月31日発行

発行 津山市土地開発公社

津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印刷 岩片山印刷所

岡山県津山市新茅町8